

石城遺聞

乾

| | | | | | |
|-------|---|---|---|---|---|
| 館書圖京東 | | | | | |
| 九 | 七 | 八 | 八 | | |
| 冊 | 號 | 架 | 函 | 類 | 門 |

2

34

026227-001-0

2-34

石城遺聞

山崎 藤四郎/編

和1冊(上58丁)

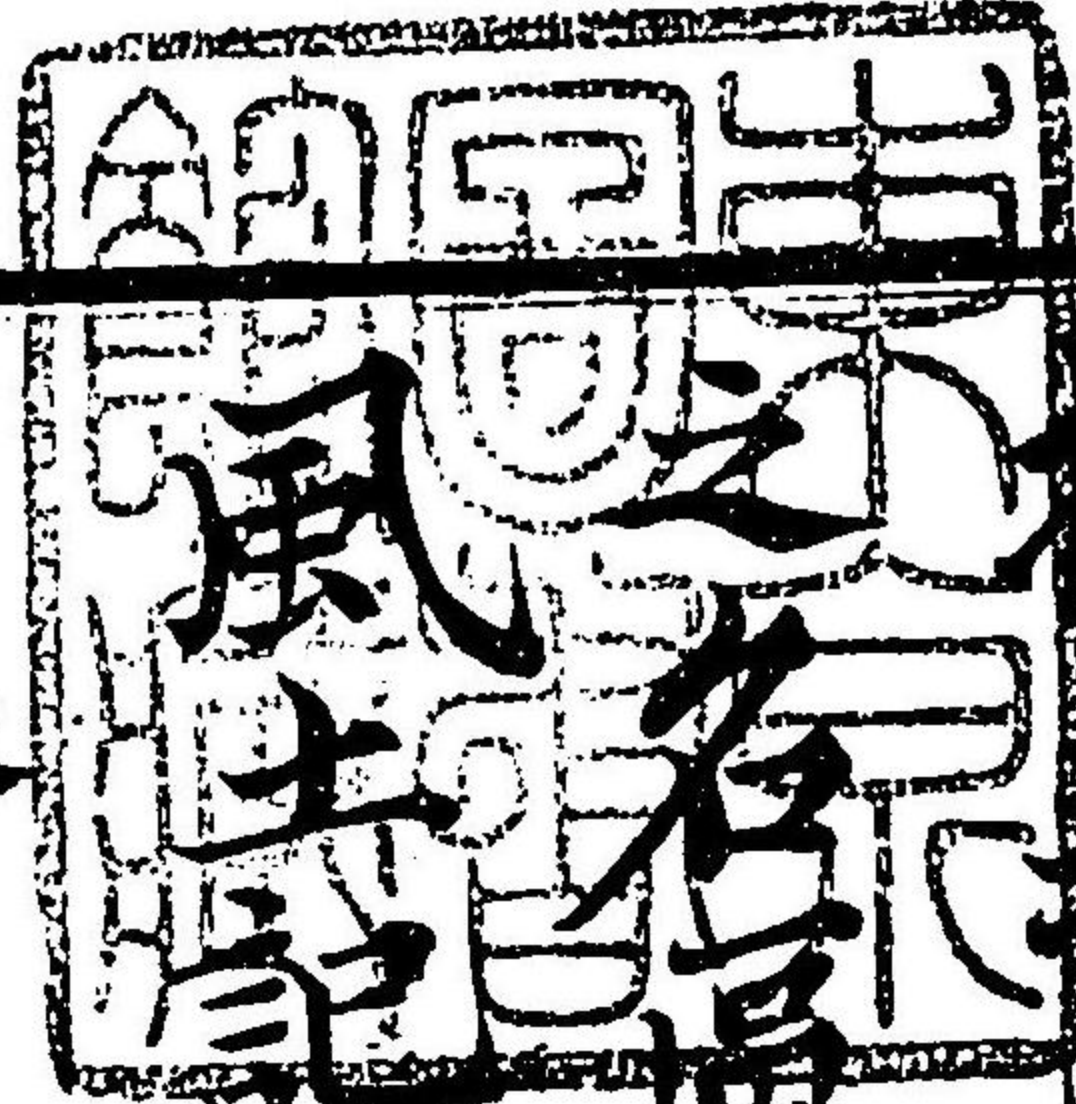
M23

ADC-3951



石城遺聞

三養堂梓



石城遺聞序



扶桑肉以博多為千古奇異
 之名區焉書於國史雜出續
 風土記石城志博多記左說拾
 遺諸書皆雖古為詳今以為
 疎余嘗謂奇異之地而有奇異

之人為奇異之人而奇異之業有
然而寥寥之無聞山嶠君宗雄
學博多之人也慕飛胡王古蹟憂悽
後來卓思甚苦乃抄輯諸書
之脫落者名曰石城遺聞余久占
君為莫逆之交一日携笈來請符一言

受而看之網羅古今補苴罅漏
細大不遺於是疎者皆詳也其所
發明不為不多豈一朝一夕之舉
哉其詳者既闡今人之盲况於陶
鑄後之慕今者乎其夏後之心
豈曰小補之哉所謂奇異之地之

人之業其在斯人歟遂書為序焉

明治己丑暮春

蕭韻老夫竹簡撰并書



石城遺聞凡例

一博多古來の事蹟ハ說前續風土記及び博多記博多古
說拾遺石城志等に載て詳なりといへとも此書ハ尚
其洩たると拾ひ足らさると補ひ或は諸書に載せた
ると所見と異しするものは之と陳述し以て識者の
是正と俟つ

一此書は博多記石城志等の殘編と謂つへきものにて
之と要するに右等の書籍と通讀せし人の見るへき
ために編輯せしものなり獨り此書と見て其不完全
なると咎むる事なかれ

一此書遺聞の表題と掲げなから下卷ニ雜新前舊町役
所年行司役場等にて取扱ひたる當時の慣行と記し

延て目今の事柄にも及ぼしたるは後世の参考に供せしものなり
一書中假名つかひの編者よ於て注意と加へ置きたれとも活字の誤植も不少且つ校正の行届かざる處あり讀者宜しく之と恕せよ

石城遺聞上卷目錄

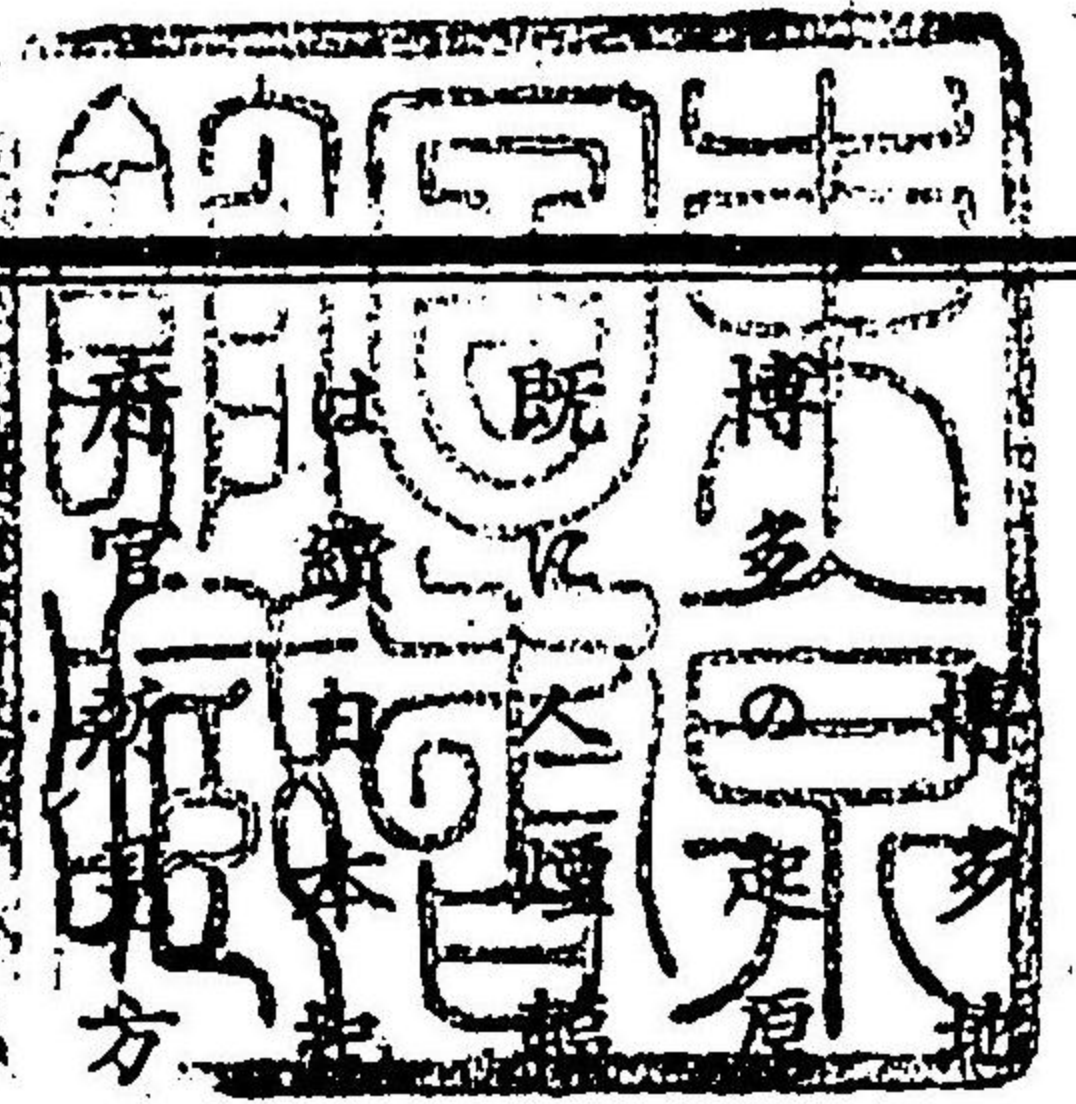
- 一博多地名の初て國史に出たる事
- 一往古の博多那の津之事
- 一豊太閤再興以前の博多之事
- 一博多の名義之事
- 一鶴臚館之事
- 一博多へ唐人の居住せし事
- 一日本三ヶ津及博多壹萬戸之事
- 一袖の湊之事
- 一博多百堂之事
- 一博多警固所之事
- 一九州探題の博多へ住せし事

- 一 菊池寂阿柳田の神殿と射たる事並博多日記之事
- 一 征西將軍宮之事
- 一 肥前國河上村淀姫神社古文書之事
- 一 柳田神社の奇瑞有りし事
- 一 柳田神社古鐘之事
- 一 道元禪師入唐渡海牒之事
- 一 乾峯士曼國師之事
- 一 東岸居士之事
- 一 妙樂寺吞碧樓之事
- 一 聖福寺佛殿の記之事
- 一 博多金博多銀之事
- 一 宗祇法師博多百韻連歌之事

- 一 聖福寺借家牒之事
- 一 博多坊正委奴倉之事
- 一 從天慶至天正博多にて戦争津内兵火に罹し事
- 一 豊太閣博多再興之事

石城遺聞上卷

山崎藤四郎編輯



名の初て國史に出たる事
 詳ならされとも上代太宰府と置れし以前
 既の地にして其地名の初て國史に出たる
 考謙天皇天平寶字三年三月庚寅太宰府言
 是續日本書紀
 齊官新羅方に有不安者の四據警固式於博多大津及
 壹岐對馬等要害之處可置船一百隻以上以備不虞而今
 無船可用交關橋要不安一也云々あり是博多の地名の
 國史に見はたる初にして筑前續風土記に博多の地名
 の國史に見はたる初と日本後紀嵯峨天皇の弘仁五年
 とせしは貝原翁も之と見脱されたるものなるへし又

此千娜ノ大津
トアル助字ノ
干ナ今ノ日本
紀ノ訓ニ千娜
ノ大津トヨミ
テ釋日本紀ニ
モ千娜ハ伊豫
國宇麻郡也ト
アリ近世谷川
士清本居宣長
共ニ上ノ于ナ
助字トシ娜ノ
大津トシ宣化
紀ノ那津仲裏
紀ノ儼縣神功
紀ノ儼河皆同
地ナラムト云
リ

青柳種信翁の說に日本書紀宣化天皇元年脩造官家那
の津之口齊明天皇七年御船還至于娜の大津及同五年
伊吉連博德書之内八月十一日發自筑紫大津之浦とあ
るは共に博多の事也云々

日本書紀宣化天皇元年五月前略

脩造官家那ノ津之口又其筑紫肥豊三國ノ屯倉散在懸隔運輸遙阻儼如
須要難以備卒亦宜課諸郡分移聚建那ノ津之口以備非常永爲民命早下
郡縣令知朕心

日本書紀齋明天皇七年

三月丙申ノ朔庚申御船還至于娜ノ大津居于磐瀬行宮天皇改此曰長津
附言官家屯倉美也氣と訓ひ共に朝廷の米倉にして貝原好古の和事
始も屯倉の天子の御米を収置て貧民の餓死を救玉らん爲あるべ
し有難き設にこそと云り又官家とあるの兼て其國政をも沙汰せら
るゝ處なるが如く青柳種信の太宰府志にも此官家即太宰府の濫觴

にして後之を御笠郡と遷し太宰府を創建せられしならんと有又同
翁の說も磐瀬の宮の址ハ那珂郡岩戸の郷安德村の内御所ヶ原と云
處なるべし此處安德天皇の行宮の址なるも依て御所ヶ原と云由語
傳へされど御所と云名の安德天皇のおましとありし時よりも遙も
古くより云傳へたるならん云々博多を筑紫の大津と云し事は博多
の名の國史に出る後續日本後紀仁明天皇承和九年正月乙巳新羅
人李少貞等三十人到著筑紫大津或は筑前の大津ともあり又博多の
地名の國史に出る事前に出す天平資字三年以後續日本紀天平資
字八年七月甲寅新羅人大奈麻金才伯等九十一人到著太宰博多津同
書寶龜七年閏八月庚寅先是遣唐使船到肥前國松浦郡合羅浦積月餘
日不得信風既入秋節彌進水候乃引還於博多の大津云々日本後紀弘
仁五年十月庚午太宰府言新羅人辛波古知等二十六人漂著筑前國博
多津問其來由遠投風化三代實錄貞觀五年四月太宰府言新羅沙門光
著普嵩清願等三人著博多津岸同書貞觀十一年六月太宰府言去月廿
二日夜新羅海賊乘艦二艘來博多同書貞觀十一年十二月太宰權少貳
阪上瀧守奏言中博多ハ是隣國輻湊之津警固武衛之要云々

往古の博多那の津之事

太宰管内志伊藤常定著に日本書紀宣化天皇紀齊明天皇紀に所謂那の津那の天津なと見はたるは博多の古名也といへる事は青柳種信翁の考に同じ然るに此那の津と唱へし頃迄は今の三宅村仲村邊の事にして此邊の入海漸くあせて船舶の遠くなるにつけて那の津の人家とも又北方に移して終に今の博多の津に至れり其いつの頃より今の土地へ移せると云事さたかならず

附言此往古の博多を三宅村仲村邊也といへる事ハ日本書紀宣化天皇元年官家を那の津之口に脩造すとあるより此官家を今の三宅村也ト博多を三宅村邊ニ引付たる説なれども續日本紀天平寶字三年博多大津及ビ壹岐對馬等要害の地へ船一百隻以上を置以て可備不虞云々あるを見る時ハ三宅村仲村邊の事には非ざるべし是を

て今の博多也とする時は彼那ノ大津とある齊明天皇の七年を距る九十八年の後にして僅に百年以内にて一二里も隔し今の土地へ遷り變るべき様なく又菅家の管崎や千代の松原石壘と詠れし石壘も大古より築かれたるものにて此石壘の所在地今の博多なる事勿論なれば此説少く疑ふべきか且宣化天皇紀の官家必しも今の三宅村なる事も保すがよく已に伊藤常足も官家の在し所今の三宅村あるべけれども其址たしうならせ今の三宅村ハ百堂の地として古瓦古礎などあるを屯倉の名残あふんと云説あれど日本紀の終迄も瓦礎を用るハ佛閣のみなり推古天皇より以前の官宅ニ瓦礎など用ひん事あるべくもあらせといへり

豊太閤再興以前の博多の事

天正十五年豊太閤再興以前の博多の位置に二説あり
筑前續風土記元祿年中具原篤信著 同拾遺文政年中青柳種信著 石城志明和年中津田元頼著
共に今の博多と前の博多の地なりとし今の大水道と

以て大水道昔の那珂川石堂川貫通す今の吳服町より起り西町土居
 町を經片土居町掛町麴屋町川端町下新川端町の境を通り那珂
 川支流に入る之を袖の湊の趾と云フ溝巾一間乃至二三步あり此
 下水溝筋下土居町より川端町に至る處明治十三年津内有志の寄附金
 をもつて石蓋を覆ひ便路を開く其道線病院前壽橋ニ接するをもつて
 壽小路と号す壽橋の明治十二年福博有志者にて新におれを架したり
 袖の湊の趾とするの説なれとも博多古説拾遺元文中熊本敬齋著
 には矢倉門の外側と袖の湊の趾となし今の博多は以
 前の沖の濱にして守護領は比惠村犬飼村邊なるへし
 比惠村田地に百堂の址及び町名残り比惠の土手と今
 も百堂土手と云住吉村の内宇ならひ松ならびまつの瓦町石
 橋の下り口邊迄を云ふと云處櫛田宮の舊社地なりしと云
 宮森見合の邊迄を云ふと云處櫛田宮の舊社地なりしと云
 ひ又博多記享保年中鶴田目反著にも古しへの博多は比惠村あたり今
 袈島塩原邊にして櫛田の社も同所ならんか比惠村邊
 田の宇に牛町鷺町社家町等の町名あり今の博多は沖

の濱なるべしといへり憾らくは他に當時の現況と記
 せしものなく筑前續風土記以下渾て百年の後に書け
 るもの故甚判然ならず續風土記等の説信ぞべしとい
 へども博多記等の云へる處も又捨かたければ爰に兩
 説と掲げて後人の考定と待つ今傳ふる處の博多古圖
 の如きも少しく疑ひなきに非らざ或ハ後の作ならん
 か僅に前の博多の面影と見るべきものは再興より百
 八年前文明十二年宗祇法師博多へ来りし時其宿所を
 龍宮寺より出て一見なしたる博多の形状左の如く
 明ぬれは文明十二年九月二十一日也此所のさまと見侍るに前に入海は
 るかにして志賀の島と見渡して沖にハ大船多くか々
 りもろこしの人も乗りけんと見ゆ左ハ夫となき山ど

も朝霧にかきなり右箱崎の松原遠くつらなり佛閣僧坊敷としらぞ人氏の上下門と並へ軒と争ひて其境四方に廣しと書けり

博多の名義之事

博多の名義の起り石城志に博とハ土地の廣博なると云ひ多とハ人物の衆多なると云なるべし又俗説に飛弾の内匠木にて蕎と作り是に乘り筑前と通りけるが内匠と憎む者矢と放ちしに内匠にはあたらで木蕎の片羽と射されり其羽の落たる處と羽片と號す此説笑べきの甚しき也云々或人の説に博多は羽形にて西那珂川の川尻と東の汐入と東西兩袖の如く又其形ち鳥の羽と伸たる如くなるにより羽形と云しと後に博多

と改たるならんと云又一説に博多の地位西の端故端瀉ならんと云り飛彈の内匠か事ハ俗説辨に出たり

俗説辨

昔飛彈の内匠と云もの唐土よわらんとて木鷲を作り是に乘て筑前を過けるよ彼をにくむ者有て矢を放ちし處内匠にハあたら木鷲の片羽を射られり其羽の落たる處を羽片と号後に博多と改むまられども内匠物の數ともせまなを片羽を以てもろこしへりゆ在唐の内妻をめとり懐妊して十月に及べるに内匠日本に歸れり程なく彼妻男子をうひ此子十三歳になれる時父を尋ねて日本に來る内匠是をうたがひて別室にからしめ汝まことに我子なら佛像半片を造るべし我又半片を造り合せてたがう事なくば汝が言を信せべしとてたがひに造りて合せ見るに少もたがふ事なき故其子なる事を信せ云々

鴻臚館之事

往古筑前に鴻臚館の有し事國史等に屢出て其所在詳

ならされとも三代實錄貞觀十一年十二月太宰權少貳
阪上瀧守ノ奏言中謹て檢スルニ博多ハ是隣國輻湊之
津警固武衛之要而塚與鴻臚相去二驛云々あり是は鴻
臚館警衛之爲め兵士と置くの建議にして塚は太宰府
と云ひ相去る二驛云々により其所在博多なる事との
すから了然たるか如し長野種正博多鴻臚館考有三代
實錄及其他諸書と引き其所在博多なる事といへり
博多鴻臚館考

長野種正著

往昔筑前ニ鴻臚館ノ在リ國史等ニ數多見ヘタレドモ其所在イツク
ニ在リント云事詳ナラズ又傳説モナク太宰府ニ在リシコモ聞ヘタ
レド然ルニアラズ依テ考フレハ博多ナルベキカト思フ緣アリソハ先
ヅ太宰府繁榮ノ時ハ異國々ノ船悉ク博多ノ海岸ニ來リ集ヘリサレバ
雖ノ津トモ博多ノ大津トモ言テ盛ナリシハ皆人知ル所也カレハ

太宰府ハ海岸ヨリ程遠ケレバ此津ニ蕃客ノ旅館(即鴻臚館ヲ云フ)在シ
トハ言也故ニ三代實錄ノ文ヲ引テ其下ニ論ズベシ同書卷七貞觀五年
四月廿一日先是太宰府言新羅沙門光著普嵩清願等三人著博多津岸至
是勅安置鴻臚館資給糧食待唐人船令得放却トアルコト博多ナルコト
ナシルベシ鴻臚館ト云ハ韓人ノ館ノ名ニテ集會スル所ヲ云フ漢書應
劭註ニ鴻ハ聲也臚ハ傳之也傳聲贊道也マシ字書ニ臚ハ以禮陳叙於賓
客也又官ノ名ナド註セリカケレバ上コ云シ如ク博多ハ諸蕃ノ船ノ來
リ著湊ナレバ必此津ニ鴻臚館アルベキ也太宰府言ト云ヘルニツキテ
彼府ニアリントナ思ヒテソハ九國二嶋ハ太宰府司ドリテ政ヲナシハ
故ニ其管領ノ地ハ何處モ太宰府ト云ヘリ同卷十一貞觀七年七月廿七
日丙午先是太宰府言大唐ノ商人季延孝等六十三人駕船一艘來著海岸
是日勅安置鴻臚館隋例供給ス此ハ博多トハナケレド海岸ハ則同處ナ
ルヲ自ラシラレタリ又十六卷貞觀十一年十二月廿八日ノ條下ニ曰是
日瀧守奏言云々謹檢ルニ博多ハ是隣國輻湊之津警固武衛之要而塚與
鴻臚相去二驛若兵出不意倉卒ニ難備請移置統領一人選士四十八甲冑
四十具於鴻臚云々トアル塚ハ太宰府ヲ云ヒ鴻臚ハ博多ナルヲ上下ノ

文ニテシラレタリ太宰府ハ海邊ヨリ路程隔リタレハ博多ノ鴻臚館ニ
兵士ヲ備ヘ武器ヲ設ケ西方ノ防禦ニセント云ヘル也又十七卷ニモ貞
觀十二年正月十五日勅令太宰府遷置甲冑百十具於鴻臚館此ハ博多ト
ハナケレトモ移置トアルコト太宰府ニアラサルヲシルベシ此餘ハ十三
卷廿四卷ニ見ヘタリ披ラキミルベシ延喜式廿八兵部式ニ曰凡太宰府
定額ノ兵馬二十疋ノ中十疋牧馬十疋並分置鴻臚館備急速ノ儲ナド見
ヘタリ上ニ云ル如ク鴻臚館ハ韓人ノ旅舍ナル故ニカク兵器ヲ備ヘラ
レテ非常ヲ防ガレ且皇國ノ武威ヲモ異國ニ示サレタルナリサレハ鴻
臚館ハ前代ヨリモアリシナルベケレトモ此号始テ見ヘタルハ上ニ引ル
三代實錄七卷ヨリナリ依リテ是ヨリ前代ノ趣ヲ考ルニ持統紀ニ筑紫
ノ館又筑紫ノ小郡トアルハ共ニ博多ニ在テ上ノ鴻臚館ナルベシト思
フ縁シアリ父君種曆ノ大人ハ筑紫館ハ太宰府ニ在ニシナラント云ハ
レタレド萬葉集卷十五至筑紫館遙望本郷懐陰トシテ作歌四首トアル
筑紫館即博多ナレバナリソハ下ニ引ル歌ニテ知ラレタリ
之賀能安麻能一日毛於知受也久之保能
可良技孤悲乎母安禮波須留香毋

思可能字良余伊射里須流安麻伊做妣等能

麻知古布良牟余安可思都流字乎

可之布江余多豆奈吉和多流之可能字良余

於枳都之良奈美多知之久良思毛

此ニ四首トアル内前ノ三首ハ何レモ博多ノ海濱ヨリ沖邊ヲ見放タル
歌ニテ上ノ筑紫館モ博多ナラムト云也此次海邊望月作歌九首トアル
海邊モ博多ナルヲ歌コテ明ラカナリ披ラキ見テシルヘシサテ舊記ニ
館ヲムロツミト訓リ群集ノ義也(集ルヲツメト訓ルハ古書ニ多シ神集
覆形ナドナリ)又小郡ト云モ館ヲ云ヘリコハ韓國ノ語ニ人ノ多シ群集
スルヲコホリト云郡ノ字モ釋名ニ郡ハ群也人所群集也トアリ故ニ韓
人ノ多シ來リ集會ル所ナル故ニ古當理トハ云也(日本紀中ニ難波ニモ
大郡小郡又高麗館新羅館ナドアリ何レモ韓人ノ旅舍也天武紀ニハ筑
紫ノ大郡トモアリコハ太宰府内ニアルヘシト種曆翁宣ヘリ)カ、レハ
館ヲムロツミト訓郡ヲコホリト云ハ稱ヘハ異ナレトモ義ハ同クテ共ニ
韓人ノ舍リナ云也(昔時ハ鴻臚館ノ名ハナキ故也令ニモ韓人ノ旅舍ハ
館トノミアリテ鴻臚館トハ云ハズ續紀光仁天皇寶龜三年十一月辛丑

罷筑紫ノ營大津城監トアルモ此ト同シキカハタ異所カソハイマダ考
 ヘスカシテ三代實錄ニ至リテ此館ヲ鴻臚館トハ云ヘルナルベシ令義
 解ニモ館舎ハ謂鴻臚館ト立番寮ノ下ニ云ヘリサテ後マデモ博多ノ館
 ト云ヘルヲアリ後拾遺集ニ筑紫ヨリノボラントテ博多ニマカリケル
 ニ館ノ菊ノ面白ク侍リケルヲ見テトリクキテワガ身ニ露ヤオキツラ
 ム花ヨリサキコサキヅウツロウ大貳高遠トアリ此頃迄ハ館ハアリシ
 カト見ヘタレ正此レヨリ後ノ世ノ亂レニ廢シタルニカ絶テモノヨミ
 ヘズ抑博多ハ古ヘ九國二島ハ云モ更也海外諸韓悉ク内屬テ此津ニ來
 集ルサレハ異國朝聘ノ爲等ニ建玉ヘル館舎ニシアレハ大厦樓閣ノ鴻
 大ナリシヲ思ヒヤラレタリ昔時サバカリ廣大ニ構ヘラレシ館舎モ修
 造スルヲモナク漸々衰ヘ行テ後ニハ館ノアリシヲモシル人ナク今ハ
 其址サヘサダカナラズ種磨ノ曰此館ノ址博多ノ内何處ニアリシト云
 一詳ナラザレド若シハ今堅町ト云ル是館町ノ遺名ナラソカ(タテグナ
 ナド云名モアリ)又ハ官内町ニテ館ヲ音ニ唱ヘテカク書ルカト語リ玉
 ヘリ猶能考フベシ上ノトドモ後ニ物セン折ノタツキニモトミダリニ
 カクハ論ヘル也

博多へ唐人の居住せし事

昔時唐船の来りし頃博多へ唐人の居住せし事勿論な
 れとも宇治拾遺物語に博多へ居たりし唐人より錢と
 かり玉と賣たる事と記し散木弄歌集にも唐人のあま
 た来りとむらひけるによめり此散木集は源俊賴の家
 集にして俊賴は筑紫へ下り博多へも日頃滞在せし人
 なり又もつて當時の有様とも想像せられたれば之と
 出す左の如し

宇治拾遺物語

はれも今の昔筑紫も太夫さだまげと申者ありける此頃ある宮崎の太
 夫のりまげが祖父あり其さだまげ京上しけるに故宇治殿に参らせ又
 私のまりたる人々よも心ざんとて唐人も物を六七千疋がやどかる
 とて太刀を十腰を質にかきけりさて京に上りて宇治殿へ参らせ思の

まゝに私の人々をやりをととして歸り下りけるに淀にて船のりける程に人まうけしたりければまれうくひきせしてゐたりけるをせにはし船まで商ひするもれせもよりきてるの物やふかのものやうなせ尋とひける中玉をやうといひけるを聞入る人をあうりけるにさだまげが舎人に仕ひけるをの子船のへまたてりけるがまゝへもておとせ見んといひければ袴の腰よりあまやの玉の大さなる豆ばかりありけるをととり出してとふせたりければきたりける水手をぬきてまれまがへてんやといひければ玉のぬしのかとこせうとくまたりとかもひけるままをひとりて船さしはなちていふければ舎人も高くうひたるまやと思ひければせもまといひければくやしと思ふ袴の腰まつゝとてまゝと氷子さかへてぞありけるかゝる程ま日數つもりて博多と云所も行著まけりさだまげ船よりあるまゝに物あしたりし唐人のもとに質はそくなりしぞ物も多く有しなせいとんとて行たりければ唐人も待よろまびて酒呑せなせしてもの語りしける此玉持のをの子下を唐人にあひて玉やふといひて袴の腰より玉を取てとらせければ唐人玉を受取て手の上ま置て打振て見るまゝにあさましと

思ひたる顔けしきまて是のいくらはせゝといひければほしと思ひたる顔けしきを見て十貫といひければまをひて十貫にかとんといひけりままといひ貫といひければそれをままといひ買むといひけりさてはあたひ高き物にやあらむと思ひてたへまつとまひけるを惜みければもいたくこひければ我もあふでとらせたりければ今よくさだめてうふむとて袴の腰まつゝとてのきまければ唐人すべきやうもなくさだまげとむかひたる船頭がもとに來て其事ともなくさへづりければ此船頭打うあつきてさだまげま言やう御そんざの中玉持たる者あり其玉とりて給らむといひければさだまげ人をよびて此供なる物の中玉持たる者やある夫たづねてよべといひければ此さへづる唐人走出てやがて其をのこの袖をひうへてくは是ぞと引出たりければさだまげままといひ玉や持ちたるといひければまぶくにさふらふ由をいひければいでくれよとまそれて袴の腰より取出たりけるをさだまげ郎等してうらせけり夫を取て向ひ居たる唐人手にいれ受取て打振てまて立はしり内に入りぬ何事まうあふむと見るをせにさだまげが七十貫が質をおさし太刀をも十なからとらせたりければさだま

げあきれたるやうよてぞありける古水于一ツも替へたる物をそこば
くの物に替てやみにけんげあきれぬべき事ぞをし玉のあたひは限
りなき物と云事今始たる事よはあらま云々
散木弄歌集 とかたに侍りける唐人をものあまふまうて

来てとむらひけるよよめる
たらちねよわられぬる身いりら人のまるとふさへも此世はよぬ

日本三ヶ津及博多壹萬戸之事

日本三ヶ津の稱及び博多の居民壹萬戸有しといへる
事本朝の書に見へて三ヶ津は明の茅元儀が武備
志に出壹萬戸といへるは朝鮮申叔舟が海東諸國記に
出たり左に之と抄出す

海東諸國記 西海道九州

筑前州 有距海濱三里山頂有火井日正照烟焰漲天氷沸而溢疑而爲礎

黄凡産硫黄嶋皆同郡十五水田一万八千三百廿八町九段州有博多或稱
霸家臺或稱石城府或稱冷泉津或稱筥崎津居民萬餘戸小二殿與大友殿
分治小二殿西南四千餘戸大友殿東北六千餘戸以藤原貞成爲代官居人
爲業行商琉球南蠻商舶所集之地北有白沙三十里松樹成林日本皆海松
唯此有陸松日本人多上畫以爲奇勝往來我國者於九州中博多最多
小二殿 居宰府或稱大都督府西北去博多三十里民居二千二百餘戸正
兵五百餘源氏世主之稱筑豊肥三州総太守太宰府都督司馬少郷号小二
殿至源嘉頼今天皇嘉吉元年辛酉大臣赤松作亂國王徵兵諸州小二殿不
到國王命大内殿討之嘉頼兵敗奔肥前州平戸源義居所尋投對馬嶋居美
女浦對馬嶋亦其所管大内殿遂盡有小二殿所管筑前州博多宰府等地後
嘉頼欲復舊地舉兵而往至上松浦大内殿迎擊敗之嘉頼奔還對馬嘉頼死
子教頼嗣丁亥年教頼又以對馬嶋兵往至博多宰府之間見月之地爲大友
殿及大内代官可申所敗而死對馬嶋代官宗盛直等亦從敗沒己丑年國王
以大内黨山名命小二復舊土又命諸州助之秋七月對馬嶋主宗貞國舉兵
奉教頼之子頼忠而往沿海諸曾護送助之遂至宰府悉復舊境頼忠既至宰
府令貞國守博多貞國身留愁未要時小二殿所管在博多西南半里民居三

百餘戸遺魔下守博多以下略之但有距海濱三里山頂有火井云々本州火
山アリシヲナ聞ズ恐クハ誤ナラシ又國王トアルハ將軍足利氏ノ也
武備志日本考

國有三津皆商舶所聚通海之江也西海道有坊津薩摩州所屬花旭塔津筑
前州所屬洞津伊勢州所屬三津唯坊津爲總路客船往復必由花旭塔津爲
中津地方廣潤人煙湊集中國海商無不聚此地有松林方長十里名十里有
百里松土名法哥熬機乃廂先也有一街名大唐街唐人留彼相傳今盡爲倭
也洞津爲未津地方又遠與山城相近貨物或備或飲惟中津無不有貿易ス
ル用銀金銅錢憑經紀名曰乃隔依理錢鑄天順永樂洪武樣自琉球高麗
准之銀一兩換三百三十三文零用三文抵一分總錢千稱壹貫每米一石常
價一兩中國斛可三石指段有花素花者三四兩素二兩大紅七八兩云々

袖の湊之事

袖の湊の事筑前續風土記に天文二十一年より博多へ
大明西蕃の諸國より商舶の來る事止ぬ其後袖の湊も
埋もりつらんとあれと宗祇紀行博多の狀況といへる

に沖に大船の多くかゝりたるさまと書き袖の湊の事
といわさると見れば文明の頃既に袖の湊はなまか如
しされと其趾は天正の頃迄も纒に残りしものと見
細川幽齋玄旨法道の記中日たかく侍りければ天正十五年五月
廿五日の事也
博多見にまかりけるに爰と袖の湊と里人のかしへけ
れは

いさゝらははともぬらさんたひころも

袖のみなとのなみのまくらに

日もくれぬいさ船よせてねもしなん

ひしきものには袖のみなとと

又豊臣勝俊羽柴下總守九州道の記に博多と云處に四五日
ありける内に袖の湊ことくしくいはれたるはいづ

くそ尋はやと申ければあるし心ある人にてしるへし
けるにあるしの云今こそ潮のさし来て水もすこし侍
れ常はむけにいふかいたくさふらふものごとを申け
るまことに唐土船よせつくへき浦とも覺へすとあり
此道の記は博多再興の後天正二十年の事也

博多百堂之事

太軍管内志に博多百堂は今の聖福寺の地と云ふされ
とも此一處にと限るへからず那珂郡三宅村の内にも
百堂と云處あつて古瓦なと多くあり又大なる礎近き
頃までありしと里民取て今は只一つのみ残り又塔
の幹柱とまじ礎残りて被村八幡天神兩社の手鹽盤と
せり石の長さ五尺許横四尺許柱と彫入し穴の廻り二

尺許也此百堂の地は北に小山と負て東南に壘田とな
れり云々

博多警固所之事

筑前續風土記那珂郡下警固村の條下に古しへ警固所
爰に有し故名付しにや若し警固大明神鎮座の地なる
故村の名とせるにやとあると石城志に此處博多と距
事遠ければ警固所の有べき地に非ずとし怡土郡雷山
に傳はれる厩應年中筑前の住人原田伊勢守種貞博多
津警固番役勤仕云々の古文書と出し是と以て見れ有
警固所博多の地に有しと見へたり足利尊氏治世の時
迄はかくの如くなりしが今に其趾さへ忘れずと書り
然に此警固所の事ハ朝野群載後一條天皇寛仁三年刀

伊國之賊船獲來之件太軍府より言上中前少監大藏種
村以下と遣警固所令相禦賊獲來候燒警固所等の事は
又同書堀川院長治二年警固所より博多へ唐船の來り
し事と朝廷に告る申文等あれば博多へ有し事勿論を
れとも其所在在れず或ハ福岡舊城本丸の地なるべし
と云説あれとも此地又博多と遠隔たれば警固所の有
へき處にあらず但此警固所ありしは往古の事にて石
城志に載たる古文書の如きは左に出示せるに等しく文
永弘安蒙古入寇以後異賊防禦のため博多或ハ管崎等
へも九州の武士特に交番警備せしものよて以前の警
固所との異也又一説筑前續風土記に所謂那珂郡警固
村は警固所の所在地にあらず警固所の料田と置れた

る處ならんと云り三代實錄貞觀十五年十二月鴻臚館
警備太軍府言上中須分置一百町名警固田如其耕營収
所輸之地子充年中之雜用云々あり
龍造寺記曰弘安年中蒙古襲來龍造寺季時壹岐陽瀬戸瀬ニ於テ合
戰有功家益季友相共ニ勤博多警固番
鎮西要略云永仁二年探題兼時令九州諸士代官勉博多警固蓋是異賊鎮
全武備故也云々
改正原田諱附録云異國警固博多番役之事自今月一日同晦日迄被勤仕
之仍狀如件

永仁三年七月廿七日

貞經 花押

中村彌二郎殿

鳴津文書云管崎警固番役事自今年正月一日至四月晦日以代官被勤仕
候畢仍執達如件

弘安八年五月一日

忠宗 在判

滿家院比志島入道殿

貞經
少貳筑後守

忠宗
鳴津上総介

九州探題の博多へ住せし事

九州探題の居城ハ筑前續風土記に早良郡浦山の巽に當りて愛宕の社にをく南に出たる山あり其上に平地あり此所則探題の城址也又永仁元年鎌倉の執權北條貞時始て北條兼時と探題とし筑前に下したる後北條家より相續て九州探題と下しけるが其城地ハ此所也云々鎮西要略にも永仁元年北條越後守兼時任鎮西探題下筑前築姫濱或曰博多又鳥飼是探題の初也云々又一説に文永蒙古入寇後建治元年北條時宗北條上総公實政と探題とす是九州探題の初也と云ふ然處此北條探題の博多へ住せし事は柳田古鐘の銘の序に北條平氏之伯關東舉速江守平隨時居茲府總管西海道九州云

々あり又近年發見せし博多日記には探題北條英時之博多の居館と御所と唱へたり由之觀之時ハ其居城は姫濱に攝へたるも非常に備へたるのみにて平時ハ博多に住し西海の政務と管理せしものと見へたり

附言近年刊行鹿兒島外史あるものに蒙古大捷の後島津久經任鎮西警固使戊筑前三載弘安七年北條遠江守爲時代之九年久經子忠宗代爲時永仁元年北條越後守兼時來代忠宗亦忠宗代之之后名越兵庫頭時家代之文保二年忠宗子島津貞久代之元弘元年北條武藏守英時代貞久三年所誅博多以上北條四替島津三世凡五十三年北條館博多中興因稱博多殿島津館博多町口故稱町口殿云々探題ノ稱ハなく島津久經初て鎮西警固使に任せられより北條島津其職を襲き博多に館ありし事を記す此事少しく信せべからざるものあれど之を記して参考に供す又筑紫の巻といへるもの正平年中足利尊氏より一色道猷を探題とし筑紫へ下し博多へ居住せしめざる事を記し北肥戰志も應永三年足利義滿澁川右兵衛佐滿頼を探題とし九州へ

下す四月廿九日滿願筑前國へ參着博多の城へ入云々同書ニ滿願嫡男左近太夫將監義俊又探題に任し筑前へ下り博多へ住す應永廿六年六月廿日大明國の使者呂淵博多へ來着探題義俊又調し日本の賊船度々明國へ渡海亂妨するを以速之を留られ度旨を述る云々

菊池寂阿櫛田の神殿と射たる事并博多日記之事

正慶二年三月十三日菊池寂阿探題北條英時と討んとし櫛田の社前と乘打せしに馬のすゝまざると憤り神殿の扉と射たる事太平記九州軍記等に載せられたれども共に妄説信ざるにたらざ爰に博多日記なるものあり則正慶二年三月十一日より起り同四月に至るの日記にして何人の書けるものにや知るべからされとも其文体と見るに當時博多へ住せし北條探題家臣の筆記なる事疑べからず是は今回朝廷定において後醍醐天皇

以降の歴史御編輯の舉有て其材料となるべき社寺舊族等へ藏する處の古文書古記録等搜索のため内閣修史局より全國へ派出明治廿年十月修史局編修久米邦武正六位 勘六等本縣へ來着ありし時面接此博多日記の談話に及び歸京の後同氏より送付せらる原書ハ肥前國校杆莊其他所々田地注文の裏に書たるもの、由加州舊藩主前田候の所藏なりしと同氏の謄寫せられたるもの也左に其博多日記及菊池の櫛田の神殿と射たる事太平記等に載たる處とも併て之と出す其虚妄と知べし

太平記

元弘三年三月十三日の卯の刻に僅百五十騎にて探題の館へぞ押寄せる菊池入道櫛田の宮の前を行通ける時軍の凶をや止めされけん又乗打きたりけるをや御とがめ有けん菊池が乘たる馬俄とすくきて一足

も前々進得老入道大に腹を立いゝなる神にてもおとせよ寂阿が戰場へ向はんとする道にて乗打をとがめ玉ふべき様やある其儀なれば矢一つまいふせん受て御覽せよとて上差の鏑をぬき出し神殿の扉を二矢までぞ射たりける矢を放つとひとしく馬のすくま直りよければさぞとよとあざ笑ひて則打通りける其後社壇を見ければ二丈許なる大蛇菊池が鏑にあたり死たりけるこそふしぎなれ
太平記綱目参考よ寂阿が此時よめりし歌とてのせたり
もの、ふのうと矢のかぶふ一すに思ひきるとも神のまらせや

九州軍記

正慶二年肥後國住人菊池寂阿の後醍醐天皇の無二の御身方なりしが筑前國姪濱ある探題北條英時を討んとて僅よ百五十騎を引率し三月十三日府大道を西に向ひて姪濱へと馳行さて櫛田の社の前を打通る時軍の凶をや示されけん又乗打またるをやとがめ玉ひけん寂阿が馬一步もすゝませこゝに寂阿大に怒りいゝある神にてもおとせ戰場へ向ふもの、乗打をとがめ玉ふやうやある其儀あらば矢一筋まゐらすべしうけて見玉へよと上さしのかぶふをぬき持て神殿の扉を二筋ま

菊池二郎武時入道寂阿

筑州 小貳 筑後守
貞經 入道 妙
惠州 近江守
大友 近江守
貞宗
匠作 北條 修
探頭 北條 修
理亮 英時

でぞ射つけたりけるかくて馬は事あくそゝみけるよさまそと打笑ひてとやりける事静つて後博多の住人奥民部丞久吉と云者神殿をひらきて見たるよりのかぶふ矢をこま犬の口よふくまたりしこそふしぎなれ
博多日記

正慶二年三月十一日肥後國菊池二郎入道寂阿博多に付畢同十二日出仕之時遅参之間不可付着到之由侍所下廣田新左衛門尉問答之間及口論畢同十三日寅時博多中所に付火燒拂寂阿が筑州江州に立使者申云宣旨使に罷向候急可有御向之由觸廻ル筑後入道殿の堅糟にテ此使二人が頸ヲ切十三日夕方被進匠作方江州ハ可打止之由被仰之間彼使逐電畢サテ菊池捧錦旗松原口辻堂ヨリ御所ニ押寄之處辻堂ノ在家ニ火付ル間不及押寄シテ早良小路ヲ下リニチメイテ懸宣旨ノ御使也人參テ可付着到之由ノ、シリテ櫛田濱口ニ打出錦旗一流菊池旗并一門等旗アマヲ捧テヒカヘタリ爰筑州祇候人櫻場兵衛允相向尋申事子細之處即兵衛允并若黨一人被打畢次武藏四郎殿武田八郎以下燒失ハ菊池所行トテ相向息濱菊池宿之處早ク菊池打出タル間息濱ノスサキ

菊池二郎武重

ヨ、廻テ楠田濱口菊池引ヘタル所ニ追懸タリ即及合戦武田八郎ハ負
 手竹井孫七同舍弟孫八并安富左近將監等被討畢サテ御所ニ押寄及合
 戦菊池入道子息三郎二人ハ犬射馬場ニテ被討菊池舍弟二郎三郎入道
 覺勝以下若黨等打入御所中既ニ御壺ニ責入致合戦之間敵七十餘人被
 打止畢菊池嫡子二郎并阿蘇大宮司ハ落畢匠作御方モ或討死或斃輩負
 手畢サテ合戦過テ筑州江州以下鎮西人々被參御所即菊池入道子息三
 郎寂阿舍弟覺勝以下若黨等頸被懸犬射馬場寂阿三郎覺勝三人ガ頸
 ハ始四五日ハ不被懸後ニ被懸之寂阿并子息三郎覺勝頸ハ別々ニ被懸
 之夜ハ取テ被置御所十ヶ日斗アリ以釘被打付札銘ニ云謀叛人等頭事
 菊池二郎入道寂阿子息三郎寂阿舍弟二郎三郎入道覺勝云々菊池方手
 負人等落行之處國々ヨリ博多ニ馳上ル勢共行向打取之頸ヲ取進之間
 犬射馬場ニ三重ニ被懸之五所ニ木ヲユイワシテ被懸其後連々ニ自
 所々取進落人頸二百餘也糸田殿即御所ニ御入參州殿十三日御登アル
 處筑後國横隈ニテ菊池孫子兒童并若黨十人計行合奉ル間即被討畢頸
 ハ御持參アリ
 同日肥後國菊池城ニ被向打手

糸田左近太夫將監貞義

規矩掃部助高政

長門探題北條上野介時直

同十五日規矩殿御入
 同十六日寅時規矩殿并肥後國地頭御家人ヲ相具肥後ニ御向アリ阿蘇
 大宮司菊池ニ一具由廣ノ白狀アル間阿蘇ニ御向注文在別紙
 筑州江州以下大名并御家人等御所ニ參籠ラレ筑州ハ前執事周防五郎
 入道趾ニ取陣江州ハ東門ニ被取陣其外大名地頭御家人等四方ニ取陣
 被宿

同十六日長門ヨリ早馬到來云閏二月十一日上野殿伊豫國ニ御渡之處
 ニ船津ニ兵糧米ヲ上置御向アル處ニ河野土居九郎通益只一騎打出申
 様此ニ御向悅入候只ノ大將ニテ御座ハ心地アリ候ハバ敵ニハヨモ嫌給
 ハシ今日ハ日モシレ候ヌ明日可入見參ト申テ引退畢上野殿御方ニハ
 明日ハ勢モ可集今夜可寄トテ一千五百餘騎ニテ土居九郎ノ城塚ヲ擣
 タル處ニ被寄其夜上州御方ニハ勢ヲ所々ニ陣ヲ取リテ被居之處厚東
 以下少々心カワリシテウシロヤチ可射之由聞ヘケル間豊田ガ再三申
 ニヨテ即落サセ給畢馬鞍以下兵糧米皆悉被捨間土居九郎取之爰長門
 周防御家人百騎斗申云我等ハ重代者也上州ノ御共シテ落ヌル物ナラ

ハ浮名ヲ流ベシト留テ打死ス正慶二年三月十一日伊豫國水居津ニ付テ同日申時ニヤガテ寄テ同十二日平井城ニテ被打人々

長門國分

- 一タスキノ三郎父子若黨以上四十一人
- 一山中七郎兄弟若黨以上十一人
- 一佐々木八郎入道父子若黨以上十一人
- 一同馬場入道若黨以上五人
- 一同又九郎若黨以上十人
- 一厚東彦太郎入道若黨以上九人
- 一岡崎父子以上四人
- 一原以上三人
- 一稗田孫四郎入道上下三人
- 一兼富又九郎上下三人
- 一豊田手人々上下十人
- 一光富ノ日野又太郎上下三人
- 一岡部小六同孫六上下四人

周防國分

- 一深津彌太郎入道懸出テ晝ノ戦ニ打死以上八人
- 一柳井父子親類以上七人
- 一右田父子若黨親類以上三人
- 一中野兄弟三人

注 周防長門地頭御家人打死ヲ注トイヘドモ此外ハ名字ヲ不知之間不及

十七日自肥前國彼杵早馬到來去十四日江串三郎入道起謀叛彌次刑部房明慶并甥圓林房并了本房等ヲ相具テ先帝ノ一宮御座アリ人々可參由申之着到ヲ付云々着到奉行ハ圓林房也自去年冬頃彼宮ヲ了本ガ千綿ノハラノ木庭ニ隠置ヲマツルト云々十四日江串甥砥上四郎ガ本庄ノ八幡宮ノ錦ノ戸張ヲ申テ旗ニ差上テ本庄今富大村ヲ馳廻宮ノ御方ニ可參之由觸廻云々江串入道ハ遠江守子息三郎ハ式部太夫任云々十七日即被向討手佐志二郎值賀二郎波多源太多久太郎高木伯耆太郎云々

同十八日平戸峰源藤五不參博多之間被召之處去々年預置大山寺々務

律僧光應ヲ相具ヲ聞二月十七日京上云々仍爲檢見自守護御代官被下使者云々

同日菊池加江入道三十五騎宰府ニ隱居タルガ降人ニ江州方ニ參ル即テ被召進之間人々ニ被預之

十九日筑後國赤目彌二郎於博多可被召置之由聞之逐電之間仰テ筑州方被向打手逐電之由申云々

二十日清水又太郎入道父子三人并若黨二人被召捕之菊池落人籠置云々若黨雖及拷問不及白狀即被預筑州方畢

同日日田肥前權守入道五百騎ニテ博多ニ參到探題ノ御見參ニ可入之由雖申之無御對面江州同前同夕有御對面

一凡今度合戰ニ不思儀事アリ炎御所ニ懸リ既ニアフナシ見ケル所ニ御所中ニ光物出來煙中ニ白鳩二飛來ト見ケル程ニ本ノ風ハ西風ニテアリケルガコソカニコナ風ニ吹ナリテ御所不燒愛菊池旗サシ

錦旗ヲウナステ類畢菊池モ旗指ヲ失テ仰天ス其上自栢田渡口打入栢田宮此ハ御所カト云フテ二三反宮ヲ打廻即人二人打コロスサテ御所ニハ大手ハ寄タルカト人ヲ以テミセケレハ使走返テサル事モ

赤松二郎則村入道圓心

候ハズト申ケレハ腹ヲ立テ御所ニ押寄ケリ神罰ヲ蒙カト披露アリ

廿二日自鎮西關東ニ上ル早馬雜色ノ五郎三郎下着金剛山ハイマメ不被破赤松入道可入京之由披露云々

廿三日自長門早馬到來自豫州進使者云馬物具ニ事關處ニ給候事悅入候但來廿二日必可參ト申間鎮西ニ一々可成由被仰云々其後自豫州落留下部數輩送長門畢自餘殘モ又可送遣由申之 田スキノ入道イマメ豫州ニアリ云々

同日院宣所持仁八幡彌四郎宗安ト云物被切頸即懸畢銘云先帝院宣所持人八幡彌四郎宗安頸云々此ハ去廿日御所陣内ニシテ院宣ヲ大友殿ニ奉付之間即召捕之云々院宣六通帶持之大友筑州菊池平戶日田三隼以上六通云々

廿四日如風聞者北國ヨリ高津道性ヲ大將トシテ十ヶ國兵ヲ相具長門ト石見ト堺三隅ト云所マテ責下云々

同日彌次刑部房并子息又五郎六郎七郎ガ頸到來楠子安藝房ハ并舍弟二人生取ニシテ進之去廿日刑部房逐電シテ大村山ニ追上之處大村永岡三郎入道追懸之討留云々

廿五日刑部房并子息等頸被懸之殘子息二人ハ幼稚之間被放之安藝房ハ後十日計此間闕逐電畢

同日長門ヨリ上州御臺以下御内人々女房付宮崎津畢

廿六日薩摩國大隅式部小三郎野邊八郎澁谷太郎左衛門尉等仰松浦黨以下廿六日曉可打之由被仰之逐電之間不及カ

廿七日自規矩殿早馬到來頸一持來去廿五日大宮司館ニ被寄候雖付

火終以不燒鷹ニテ守護之間成恐退畢サテ召取案内者被寄之處大

宮司領門蘇内在家等ヲ燒拂鞍岡山ニ引籠其道間ニス々シコハチキ

ヤウマメアレ此等難所也日向道ヨリ擲手ノ案内者ヲ被申之間日向國

柴原桑内二人ニ仰テ進案内同日彼人等下人下向云々城内勢兵五十餘

人以上ノ勢五百人斗也其外隠レ村ヲ大宮司知行之間其所ニ引退ナハ

不可被打之由披露之

廿九日自肥後早馬到來阿蘇大宮司并菊池二郎鞍岡城ヲ落畢生捕并頸等在之由告申サル

同日自長門早馬到來石見國ヨリ吉見殿ヲ大將ニテ三千騎ニテ向間大

峰ト云所ニ豊田厚東以下勢ヲ被向廿九日卯刻ニ矢合申告來

三十日三川守殿乙隈殿文字關ニ御向ノタメニ宮崎マテ御出四月二日長門ニ御立

四月分

一日彈正次郎兵衛尉去月廿八日長門ニ越之處今日歸參畢長門大峰ニテ合戰及度々云々

同日野邊八郎親父六郎左衛門尉以起請文無誤由陳申之間蒙御免出仕畢

同日自門司關三河守殿告申云長門國厚東由利地大峯伊佐人々與力高津

道性去一日辰時押寄長門殿御館畢堀ヲホリ切りカイヲテチカキタル

間無左右不打入寄手射シテマサレテ引退道性子息厚東子息痛手ヲ負

畢敵重寄時ノ聲ヲアツレ間見之告申云々同日參州大隅國御家人日

田肥前權守入道宗像大宮司并豊前國宇佐築城上津妻毛下津毛ノ四郡

人々ヲ被向畢

四日雜色宗九郎自關東打返金剛山ヲハ近日可打落赤松入道京都七條

マテ打入テ自六波羅邊返大勢被打テ逐電畢云々備後鞆ニハ自四國打

渡之處被追返畢平戸峰源藤五四國ノ勢ニ對面シケル由見シ云々

菊池若黨宮崎太郎兵衛入道頼ニテ自害所持文書ハ燒失畢云々其下人生取シテ恭ル

長門ニハ敵百餘人打取之畢自餘ハ逐電畢昨日三日マデハ無別事云々同日規矩殿自肥後御返鞍岡山ニテ所取頭三十二生取二人持恭此外比丘尼一人生取肥後ニ被預置此ハ大宮司若黨ノ妹也規矩殿ヲチライマ

イラセントスル間召捕云々同日自長門早馬到來敵雖押寄射シテマサレ引退敵百餘人打止切頭被戀畢城内ハ手負十三人死人二人由申之云々

一或人ノ從女去四日懸置頭ヲ見ニ行テ見程ニ身毛ヨダチ覺ケルガヤガテ勞ヲ付ケリカ、ル程ニ或僧一兩人彼家主許ニ行對面シケル時彼從女勞シケルガチキアガリ男ノ風情シテアチギ取ナチシ僧ニ向色代シケリ僧ヲ上ニ請シ下ニ坐シテカシコマリケル間彼僧アヤシミテ問云何ナル人ニテ御坐スルゾト尋ケレバ答テ云我ハ菊池入道ノ甥ニ左衛門三郎ト申者也童名菊一トテ有知山ニテ兒ニテ候シ人皆知テ候但菊池ニテ新妻ヲムカヘテ十六日ト申時菊池ヲ罷出候シ時相搦今度ノ合戰ニ無別事シテ返テ二度見タテマツラバヤト申候

シカハ彼妻女涙ヲ流シハカマチキ候シ時ハカマコシテアテ、候ヘシ面影于今不忘我ヒタイノカミチ切テ彼妻女ニトラセ彼ノ妻ノ髮ヲバ我マモリニ入テ頸ニカケ犬射馬場ニテ死候シ時マデ持テ候トカタリ申テ涙ヲ流シケリ但敵ヲトラテ死タルコソ口惜ケレト申ケリ妻女ノ事ヲ申出時ハ哀傷ノ氣色ヲ顯シテ涙ヲ流シ合戰ノ事ヲ申出時ハイカレル色ヲ顯ス又申云ク我息濱ヲ打出シ時夜フケルマデ酒ヲノミ水ノホシク候シチ吞ズシテ打出テ死テ候間水ガホシク候トテ水ヲコヒ小桶ノ二桶ノミケリ又我ハヤウゴニテ候酒ノミ候ハントテ酒ヲ提ノ一提ノミケリ水ヲノマズシテ死テ候シ間我ニハ常ニ水ヲマツリテ給候ヘ又後世ヲ訪テ給候ヘト彼僧達ニ語申ケリ其又貳日僧申云カ、ル越弱ノ女性ノ許ニ御ワタリ候ハタガイ候ト申ケレバ家ヲモズ候テ如此候ト申ケレバ家ヲツクリテマイラセ候ハント申テ卒都婆ヲ作テ松庭ニ立ニ行ケレバ御共可仕ト申テダフレフシテシハシアテチキアガリ彼勞サメヌ殊ニ漢字ヲカク時我名ヲソトハニカ、レ候ハヌト申ケレバヤガテカク名字ヲソトハニカキテ立ケリ

此事疑ふべしといへども當時の九州も大略官方へ従ひし事をれば博多も元より南朝へ屬せしならん果して然る時の西海の要地たる博多へ官の居給ひしに左もあるべき事にて大明への使節も勿論此地より發せられたるなるべし茲に疑と存し之と記して後考と俟つ又此宮の大明と交際有し事の皇明資治通紀に載たり筑紫の卷正平十五年三月前畧

菊池肥後守
武光

博多は城をきづき宮をすへまいらせ新田の一族を守護の武士としてたきまいらせ我身武光のまた肥後の國へぞかへりける中略
明れば建徳二年三月大明の使者洪有玄我國へ來り肥前の國大村の出輪は著岸す大村彈正少弼其よし宮の御のさ早馬を立かつ肥後へも早馬にて注進したりけれは宮より菊池を召れ其よし仰下さる使者の趣さの日本大明隣國會盟し唇齒の國なるべしとのことかつ日本皇帝よまみへ奉んまを給ぐふ大明帝の勅書を持渡るよし聞ふ菊池武政申

肥後守武政
武光男

やう異國の使者遙々と吉野殿迄くらんまど路次のみほだけ有てかなふまど敵の帝へ對面させんの本意あり大明と好を結び後に彼國の大軍を招き凶徒を誅伐せん謀も相なるべし宮を日本皇帝とし奉り此博多へ使者を召れ威儀をつくる御對面候て返書をも遣候よふ然べく覺候と申されけれは宮を始奉り満座是に同じ使者を博多へぞ召れける是よりて大村彈正少弼理義大明の使者を相伴ひ博多へ至りけれは宮は天子の衣を召せまいらせ月郷雲客次第に列座し新田の一族菊池の類び九州の大名小名皆衣冠を正しく階下に列を引其体實まぐぞみへさりける使者泰内し勅書をさ、げ万歳を祝す其後種々饗應ありて旅館の崇福禪寺當時崇福寺の御笠郡に在聖福寺の誤あり明帝より虎豹皮五十枚砂金千兩馬十疋をまいらせ宮よりも種々の音物も返書をととのへ使者を送りうへさる其返書に日本國皇帝懷良大皇帝の階下に奉復とぞ書たりける問使者歸朝の後も征西將軍を日本皇帝と思ひて其より年々使船肥前のうらよ來音信贈答ありける菊池が名譽申ばかりあかりける云々
異稱日本傳所載皇明資治通記

辛亥洪武四年八月日本國王貞懷遣使朝貢ス

此洪武四年の日本南朝建徳二年にして北朝の應安四年也

辛酉洪武十四年七月日本國王貞懷遣僧如瑤等貢ス方物

此洪武十四年の日本南朝の弘和元年にして北朝の永徳元年也

肥前國河上村迄姫神社古文書之事

肥前國佐賀郡河上村鎮座迄姫神社の古文書に文保二年博多炎上云々の事あり此博多炎上の時とあるの文永蒙古襲來の時博多焼亡せし事といへるものか文保二年の文永十一年より四十五年の後也參考のため之と出す

博多炎上之時彼正文等紛失之間可被加國判之由就解狀留主所御外題明白之上者任先例在應官人等加署

文保二年二月十日

櫛田神社の奇瑞ありし事

建武三年二月足利尊氏同直義京都の軍に打負け九州に下り太宰府滞在の時博多の櫛田宮住吉神社の下女に神託奇瑞ありし事と梅松論に載たり

梅松論

凡今度九州御座の間諸社の不思議をも味方の吉兆しるすに違あらざ殊にありがさかりし太宰府に御座の時博多の櫛田の宮住吉の神社の下女に託して曰く我今度兩將を都まで守護し安穩に送るべき但合戦を致べし白旗一流鎧御劔弓征矢上矢の鏑をさし添てたてまつるべしと御託宣新ありし間悉調進せらる御使の者見前に神託の女弓を張上矢の鏑をとけて曰我をうたがふ者多し其證に今度武將天下を取べく此矢一もとづるべからせとて櫛の木細枝を射る事三度一もとづる、事なし更に賤女のまごにあらせ云々

櫛田神社古鐘之事

柳田神社の古鐘ハ筑前續風土記に里人相傳へて松浦
佐用姫が寄附也といへど佐用姫ハ宣化天皇の御時の
人也柳田社ハ夫より遙に後孝謙帝の御時勸請せしか
ば時代相違里人の説信し難し若ハ佐用姫が他所へ寄
附せし鐘なるを後世爰に寄納せしにや其銘ハ不宛不
測且感容之を記せる由京都の人言おこせり天正五年
豊後國綾部玄蕃允といへる大友の臣此鐘の古き銘と
削り去て新にふつゝかなる文字と長く刻付我寄進の
如くせり古き銘と削りし跡今も見ゆ云々あり此鐘佐
用姫が寄附也と言傳へたるハ誤りにて此鐘ハ曆應年
中邑人淨願の寄附にして銘ハ鎌倉建長寺仲岩圓月の
の作也建長寺四十二世諱圓月号ハ仲岩ト稱ス永和元年寂世壽七十
佛種慧濟禪師ト号此僧精屋郡多々羅村顯孝寺ニ住セシ

アリ此銘ヲ書シハ該寺住職中ノ同僧の書たる東海一瀝集に
載たるト出し併せて現在の銘文とも出す

附言筑前續風土記拾遺に此鐘古き銘を削りたる跡は見ゆれど一瀝
集に書ける銘の如き字數見へねハ一瀝集よのせたる處の鐘は早く
失て他の鐘の銘をけづり綾部ガ寄進の如くせしならんと云へり

柳田宮鐘銘并序

昔在大日靈貴會素戔嗚于天原而請取所佩之十握劍呵之化生五女兒死
爲神其長曰某娘舊祀于伊勢國柳田川之旁然而其行宮總以柳田宮稱焉
惟在筑之博多者持統天皇朱雀朱鳥ノ誤カ年中之建也距今六百五十餘
歲也北條平氏之伯于關東舉遠江守平隨時居茲府總管西海道九州之時
尤敬本宮百廢悉興餘是博多人厚欽此神凡有所祈皆答如谷應聲既而祭
禮如法祭器完具惟鐘未有以爲缺也邑人淨願梅已所用繫積朱寸遂以元
應元年秋七月鑄而成之適當朝廷命征夷大將軍足利源某爲伐平氏自正
中至建武凡一紀天下大亂宮亦累災其間異祥良多蓋神見其事於未萌而
但人不預知也逮乎天下定于一朝廷以博多邑賜大友式部丞源某爲賞戰

征夷大將軍
足利源氏
式部丞大友
近江守氏

蘇我式部
暹世同宗
暹ト号貞宗
眞箇ノ子或
ハ弟ト云

功也邑人以其化政悅之若時雨降也茲之明年重建本宮高廣壯麗過於舊制見聞隋喜聲喧街衢於此淨願亦見義勇爲再役鬼氏以曆應三年四月二十七日其功畢矣以今者視昔者則其音韻矣以昔者視今者則其音韻矣鐘々之響上于雲霄可以感仰神靈而坐致吟蛩也後二年謁予以銘銘曰

樂之興也 器之鍾之 不窳不穢 感且容之 堅其質兮
虛厥中兮 扣之必應 谷神空兮 聲出于外 神而通之
同現在之鐘銘

奉寄進西海道筑前國博多冷泉津櫛田宮鐘一基諸行無常是生滅法生滅滅已寂滅爲樂右奉爲意趣者天下泰平國土豐饒殊者護持撞那息災延命武運長久子孫繁昌家門榮花萬民安全惣而津內堅固諸人和合各願圓滿見聞貴賤居諸威光不遂寒暑順時皆人令滿足故如斯

天正五丁丑年十一月吉日

豐後國北浦郡國東郡都甲庄領家住人
綾部立蕃允藤原理昌

道元禪師入唐渡海牒之事

博多商家の女子姿色あり十四五歳の頃より何處ともなく三尺斗の蛇来て傍と離れを殺して捨れと其者歸らざる先に又来る時に道元禪師入唐の志ありて博多に滞在せられ此事と聞其蛇ところして其害と除かれたる事ハ武將感狀記に記せり此道元の入唐年月及び入唐渡海牒と建斯記曹洞宗本山越前永平寺十三世建斯和尚著に載たり當時博多より入唐者の賢況と見るたの之と出す左の如し但渡海牒ハ後に書入たるものにて明全とあるハ千光國師の高弟にして入唐中被地に没すと云ふ

建斯記前畧

師(道元禪師)スナハチ明全和尚ニ隨伴シテ二月廿二日ニ東山ヲ出テ西海筑前ノ博多津ニ赴キ三月ノ下旬ニ商船ニ乗リテ纜ヲ解ケリ補此時ノ渡海牒ニ通永平寺ノ寶庫ニ傳在セシカ正徳甲午ノ三月九

日ニ燒失セリ其文ニ云ク

建仁寺住侶明全相伴兩三之門弟爲入唐赴博多之津西海道之路次津津
關關等事の無其煩可有勘過者依
院宣執達如件

貞應二年二月廿一日

左兵衛佐判

又

建仁寺住侶明全道元廓然亮照等爲渡海下向西海道路次關關泊泊無其
煩可有勘過之狀如件

貞應二年二月廿一日

武藏守判

相摸守判

武藏守北條
泰時相摸守
北條時房京
都兩六波羅
在勤ス

乾峯士雲國師之事

乾峯士雲國師ハ博多の人也母才子と求んと欲し常に
志賀島の文珠菩薩に祈願す菩薩劍ともつて其胸と割
くと夢みて肚む弘安八年博多に生る骨相奇異資性聰

慧也十四才にして承天寺の南山禪師名士雲聖一國師に訖
法嗣建武年寂

才禪師其非凡なると見て納戒薙髮と許す成長之後鎌

倉建長寺に至る機辨迅捷敢て抗する者なし後京都の

普門東福南禪鑑倉の圓覺建長の諸寺に歷遷す文和四

年詔有て入内帝北朝後光
嚴天皇清涼殿に出御師の法演と龜玉

ふ師靈感甚多し加茂の明神室に入て戒と受北野天神

雙筆と贈りて金剛經と書せん事と求むと云ふ將軍義

詮締依尤深し康安元年臘月十一日偈と書して化す曰

烏鴉出西天 龍樹入東海 聖箭已離弦

猶有返回勢

世壽七十七法臘六十四勅して廣智國師と云ふ

東岸居士之事

博多古説拾遺に東岸居士と云人の博多の出生に去て
 市小路町に三宅として富商にて有ける由と記し其傳記
 と詳にせむ居士の洛東雲居寺の僧也嘗て聖一國師の
 弟子自然居士と師とし壯年の頃より頓宗に志と留め
 參禪と以業とすれども其頭髮と髻せず僧衣と着せず
 或は高座に登りて法と説き或は羯鼓と撃て踊躍し或
 ハ扇と執りて舞ふ人詰つて其番髮縮衣と着せざるの
 故と問ふ曰く元來住所なければ出家の謂れなし出家
 に非らざると以て僧衣と着せず髮は長く亂るれども
 自ら道に入るの縛繩とし東岸の柳と以箒となし知解
 の塵と拂ふ云々問ふ者口と柑んで不言弘安六年寂す
 妙樂寺吞碧樓之事

妙樂寺吞碧樓ハ當寺無我吾藏注開山月堂和尚ノ弟子貞和四年
 元ニ渡リ居ルヲ十年ニシテ歸
 朝貞治二年再ヒ航海大明洪武十四年彼地ニ寂ス
 明太祖洪武帝歸依甚深ノ菩薩ノ号ヲ贈ルト云フの建る處にし
 て妙樂寺沖の濱則今の妙樂寺町に有し時其寺内の西
 南隅に有しと云フ此樓の記と大明抗州靈隱禪寺の住
 持來復作之洪武七甲寅の年也日本應安七年其他此樓の題
 詠頗る多し載て當寺の藏本石城遺寶にあり當寺ハ天
 文七年に焼失去天正年中又兵火に罹れり慶長年中黒
 田長政入國の後今の地へ移されたり

附言南山史ニ後醍醐天皇々子玄選字無文深信禪教興國元年々甫十
 八入建仁寺爲僧四月與僧元通航海入元嗣法福州高仰山古梅友禪師
 正平五年歸朝住于筑前博多石城山云々載り此件曾て妙樂寺ニ傳
 へざる處にして同寺無我吾和尚の行狀記に師諱ハ省吾字無我初名
 海信花園帝ノ庶子ナリ母ハ仁木氏以延慶三年正月十一日誕焉正妃

嫉而逐毋棄子其臣林氏詐棄而育之云々あり此事をして信ならしむる時は凡同時代にして二皇子妙樂寺に住せられり

石城遺蹟

石城山吞碧樓記

吾無我上人ハ搏桑產也泰歷中國有年矣一日謁余而告曰吾受經之地ハ瀕于東海四顧混然水雲一碧嘗作小樓爲先師月堂禪燕之所因題曰吞碧以識其勝敢請師一言記之余曰噫子之所謂吞碧者獨有見於海乎海於ル空虚其レ猶印水耳即一隙而窺其明舉一滴而測其廣虛空也大海也然則孰爲優劣哉蓋虛空之量ハ包括無外空體廓周充編法界紺御虛朗如淨琉璃觀之不無攪之不有心存目寓融接無邊ナリ吞碧之義豈不有得於是乎雖然空不自空即空是色色不自色即色是空空色一如無染モ無襍モ故知如來ノ妙心菩薩ノ妙色皆同一眞非有別法譬之普賢ノ毛孔世間種種ノ名像等ノ物悉入其中無有留礙登斯樓者作是觀已廻至百億刹土百億日月百億須彌帝青光明洞照眉睫曾何有間於毫芒也哉余以是說記吞碧之義上人其論之否乎嗚呼天下

好樓居者多矣吸光飲綠然モ率子以燕酣相歡鮮有休息于禪悅者今上人獨見於道而識以吞碧則斯樓高顯殊特視慈氏之宮不爲侈矣余記之何辭洪武歲有開逢接提搭春二月二十有四日杭州府靈隱禪寺住持豫章釋來復記

寄題吞碧樓

南堂遺老清欲

台州臨海人姓朱氏嗣法古林ノ茂初出世經水開禪後遷蘇州靈岩嘉禾ノ本覺晚年退去稱南堂遺老

石城樓上倚欄子 萬里秋空一望吞 龍卷黑雲歸洞府
日行黃道墮金盆 三邊翠浪開天壘 兩岸青山夾海門
廣不可量深莫測 灼然方外有乾坤

又

四明祖障

郵人姓陳氏字仲猷號歸菴嗣原叟端住天寧本朝應安六年奉大明帝命使本邦

石城高倚翠雲端 吞碧層樓宇宙寬 地縮九州連五島
水通百濟極三韓 華鯨吸盡珊瑚出 金翅分開渤海乾
巨浸山來有源委 晚潮推月上危欄

又二首并序

雙桂惟肖

妙樂寺ハ乃冷泉石城ノ遺址也所謂香碧ハ在寺ノ坤隅元明本朝哲匠題詠滿壁大蔭禪伯傳聞歎絶シ命能畫者圖之待瑤席竹菴禪師ノ一筈以系シ其上且屬余續シ紹焉憶シ先師昔磨テ官差往莅シ聖福予方弱歲シ巾侍メ以行于時無方ノ應台踞妙樂室與先師有舊進寺消日其間借榻寓シ干樓下殆二旬餘也登覽之美定所目擊予已七袞加フ二歲月多矣樓モ亦崩壞不修無復彷彿トシ觀圖弗能無感則託テ瑤席韻未有以榮耀亦幸也况大蔭好事盛意曷シ得而拒焉倍和二章以還スト云

飛棟吞溟碧

林觀溢十州

烟濤知近遠

日月互浮沈

訪古看詩板

寬懷謝岩甌

炎涼餘半百

倒指曾遊

登臨宜曠望

突起據孤洲

眼視三桑變

身如一芥浮

寺鯨敲月掉

沙鳥答風甌

聞說今蕪沒

關西欠勝遊

聖福寺佛殿記之事

聖福寺佛殿の記ハ聖福寺佛殿開山千光國師建立の後

石城遺寶ニ
所載河南陸
仁妙樂寺香
碧樓ノ詩ア
リ樓居昔在
石城頭海色
山光長滿樓
弱水東流三
万里滄溟俯
視一浮漚應
間波浪秋無
際席上烟雲
暮不收我亦
何心來避世
舉頭日出風
塵州

漸く破壊せしと正平年中當寺三十三世無隱禪師之と
再建落成の顛末と記せし碑文にして撰者河南陸仁と
あるハ米舶當時博多へ寄留せし人なるべし此碑いつ
の頃よりか紛失其文傳へらざりしと稿保己一の群書
類從に之と載たり天保五年當寺百廿四世湛元和尙其
群書類從に出す處の文と記し碑と佛殿の前に並たり

聖福禪寺佛殿之記

西海道筑前博多津之安國山聖福禪寺關个光明菴法師開化之地也師自
日東入中國抵湘東天台乃是宋淳熙間也歲大旱請師禱雨身發千光上燭
天雨大澍世因以稱云事在天童虛菴和尚記茲不書歸大啓宗乘初始茲山
則元久改元初年也至今無隱禪師已三十三代矣禪師亦自祝髮浮海至中
國凡三十有三年大得其道以歸名震朝野即奉旨主席茲寺乘塵之暇願瞻
杏詠慨歲月之推遷念前人之靈迹觀殿宇之無成遂誓志於作興於是舛堂
據法牀鼓集衆曰茲寺千光國師所建寔西海法窟日東名利廢而不治其如

法師覺皇何乘咸悅唯禪師命是從赴功趨事莫散或後詢諸同格則寺之
歲入緇素衆多廩稍恒不給非勸募難以有成也乃榜千山門而施者咸集焉
師嘗以春秋農隙時遊覽山水間達友富人傾聚落迎拜錢幣之獻材木之奉
舟街騎腫以先至爲幸至若不影其名而樂施者恒有之禪師又以衣鉢之餘
悉助其費亦凡若干縵苟非道尊重一出大公至正忠義之心其能致此哉爲
殿四楹崇若干赤廣若干赤壘石爲基覆以瓦礫以夾左右回廊輪奐翠飛
藻稅妍麗中設三世佛像塗金飾朱五采鮮好天光日華瀟灑極極間鼓鐘相
宣梵唄相應真如祇園勝地也迨爲九州冠此今之所擬而昔之所弗及也經
始於正平十年月日落成於正平二十有二年於是寺之侍史寺之僧以禪師
之命來徵予記予適以避世至其國與禪師素相聞今復相逢過於万里之外
義弗敢辭切惟道無顯晦時有汗隆則道從而顯時汚則道從而晦然又係天
網維其道者爲何如耳嗟夫中國自紛變以來天下之郡縣及名山大川佛氏
之宮百無一二存者兵燹火燬荒臺斷礎相望於草莽之間氏之徒又皆逃難
解散所存者不知其幾何人也而佛氏之道又茫乎而無所求矣予自乘桴至
此葦東國之用兵亦已三十有餘年而佛氏之宮無一散廢者戰者戰畊者畊
而民自若也予謂三代之用兵法制之善亦莫過之天何中國之倡禍亂者若

是其慘酷也抑天之未定歟天之使然矧乎禪師亦自中國歸祝釐演法大振
宗風於東土之國上以發諸祖不傳妙下以開來學所悟之方以一心而覺一
世之所迷合一世之覺以啓百世之所覺嗚呼斯道既晦中國而大顯於東土道
之所存師之所存也道之係乎人者不已重乎其於建是功立是業崇其堂構
而有以大其觀瞻所以尊其道是不忘其基本也豈惟固陋就簡視若傳舍漫
不加省者其可同日語哉後之覽者能無感焉正平二十三年春二月七日河
南陸仁記並篆額書丹住持者舊等立石
文政十年丁亥九月於群書類從中得此文終題篆額書丹之字則當時立石
以所勸者可也今茲住持等夷湛元欲與博多耆舊等謀立石以仍舊貫請
官々賜志摩郡介屋石以爲碑材即勸此記以立佛殿之前云爾扶桑寂初禪
窟前住持義梵仙厓識並書額二川相近勒天保五年甲午七月立石

博多金博多銀之事

博多銀 一名讓葉銀トモ云フ量目廿九匁有ハ柳田神社の神庫に
此圖石城志及金銀圖録ニモ出セリ
ありて他に見ざる處也此極印に録二とあるハ年号の

文字にて享祿ならんと石城志に誌したれとも金銀圖録にハ之と文祿とし文祿二年豊太閣朝鮮征伐の時博多にて製造せしものと云り此説信をへさか東京博物館ノ摸造品アリ其製粗拙ニシテ原品ノ如クナラス極印ニ文祿二然トアリ蓋シ金銀圖録ノ説ニヨリ故テニ文ノ字ヲ加ヘタルナリ處博多にて製せし一種の金あり此金の事金銀圖録にも載せざる處絶て世に知る者なし量目六匁八分五厘極印に博多改所とあり天福元年の製にして今明治二十二年と距る事六百五十七年也其形圖の如し此金福岡或る人の珍藏せしと好古の輩之と購ひ明治十八年柳田神社へ寄附神寶となしたり他に亦一種の銀あり正安二年の製にして前の博多金とひとしく博多改所の極印あり之と見る時ハ其頃博多へ金銀座ありて製造せしも

るへし惜むらくハ左圖の如く後人の之と脇指鋸に變造せしと以て其全形と見る事能ハナド但裏面長の字の下文字あれとも磨滅してみへナ今の量目廿二匁三分あり正安二本年と距る事五百九十年也

博多金

表



裏



表



銀多博
裏



附言貞丈雜記云古代大判小判小粒等のなりし事を言ひ道照愚草を引き禁裡權御進物と砂金何兩とあるに當時砂金まれなる故黄金を以て納之是等の舊記にある黄金亦金子なぞに今の大判小判にあらざ板金竿金を切りたるもの也といひ又金銀圖録にも昔時小判のあきものとして壽永小判大塔宮小判の如き甚謂れなく何等の故を以て古人是等の金幣を作るや嘗て開正徳年中世上古金を倣賞する事流行せし時種々の假作物出来ざる由を記せり此等の説による時の

前の博多金博多銀の製年天福正安共に時代古く疑ふべしといへども既に板金竿金を切り其通用ありし後之を小判となし小粒となす事又怪しむべからざる也十三朝紀聞にも享保二年四月遣青木敦書干加奈澤相摸伊豆參河遠江訪索遺書古記敦書嘗慕乘之次獲古貨數品中有源頼朝時金銀形圓而堅長如今小銀重六分八釐但其作桐章及壹兩字鑿之背面以見正面又有室町氏時銀銀謂花降小判菊小判等亦形如今小銀亦正圓也重目壹錢餘至四錢餘各款曰壹兩其花降作櫻花圖菊銀或作菊章或作菊花圖有一種花降形方而堅長重四十三錢款曰十兩云々業已に頼朝の時の金銀ありし事を記せり亦筑前續風土記拾遺博多の部綱塙町の處に此町に神屋清次と云ものあり先祖の神三郎兵衛と云者にて文治二年頼朝郷より博多津に判座を定められ四條院の天福元年博多銀吹立にありし場所は談義所なり數十萬の銀小判吹立成就せしかり小判の裏に六右衛門と極印居りたりと記せり果して此説を以て信せしむる時の銀小判のありし事も古き事にて天福元年銀小判吹立たるにあらざして共に金小判も吹立ざるものなるべし天福の年号暗合するをもつて参考のため併せ

て之を記す

宗祇法師博多百韻連歌之事

文明十二年宗祇法師ノ飯尾氏紀州ノ人自然齋又種玉庵ト号連歌
逆旅二年七月率千博多へ下りし時九月廿八日其宿所龍宮寺
に於て連歌と執行す世に之と博多百韻と云ふ

| | | | |
|----------------|----|--------------|----|
| 秋更ぬ松のこかしの沖津風 | 宗祇 | 霧よまぐる、波の寒けさ | 空吟 |
| 月さそふ夜舟の上に雁鳴て | 弘相 | 夢に旅ゆく床のあつさ | 朝首 |
| 古郷の遠くあるとも忘めや | 英譽 | 山にいづくも夕くれ乃春 | 岸孝 |
| そことさき鐘やのすみて残らん | 宗歌 | わらしの後の音ぞのどけき | 宗賀 |
| 分て見んをちの梢の花ざかり | 貞本 | 松より奥の明初る空 | 永賀 |
| 野への雪さゆる方にや降ぬらん | 昭阿 | 山遠き江の水もこやらせ | 祇 |
| 舟よばふ川瀬の波もまづうにて | 吟 | 雲に聲する鳥のつれ | 相 |
| 時鳥待のつれなき暮つらう | 孝 | 夜よなる月の影そやのめく | 百 |
| 下萩の風の末葉に露見へて | 祇 | 露立のゆる山里の道 | 歌 |

| | | | |
|----------------|---|---------------|---|
| 谷隠れ水の音て人もなし | 賀 | くちさる橋のいほわさしけん | 阿 |
| 名は今も昔ながらの跡とめて | 歌 | たのめのかさる世とも思ひせ | 祇 |
| 逢ぬまもよしや見へつる心ざし | 百 | 忘れんものかひとりの夢 | 賀 |
| 分まどふうつつの山べのかり枕 | 本 | 夕霜さむみ月ぞまゝる、 | 歌 |
| 虫は音も草も枯行陰よ来て | 相 | ふる郷とへとさ秋の風 | 祇 |
| 冷しき頃こそ空もあそれなれ | 阿 | 入日のかげや人の世の中 | 孝 |
| 幾度のうさ身斗よめぐるらん | 賀 | くやしやかゝる戀れ山道 | 百 |
| 消かへる雲も思ひの色なれや | 吟 | 涙よむらふ暮のかなしき | 譽 |
| 朝朝都を花よ旅立て | 祇 | いのなる宿の春をとらま | 阿 |
| 鶯の出初る野の霞む日に | 百 | 見へぬ聲をぞ風よ聞ぬる | 孝 |
| 片敷の袂涼き秋の來て | 歌 | かげの露けき東雲の山 | 祇 |
| 霧暗き尾上の月や残るらん | 本 | うへる男鹿のさく音淋しも | 吟 |
| あらいなるうりや人の影にして | 相 | けき吹風よ夢の覺けり | 阿 |
| 雲や知夕の雨の跡もさ | 祇 | ひなしき記念面影の空 | 百 |
| 問捨し後の幾日を送るらん | 孝 | なうらへんとい身を思さや | 相 |
| 哥うたもまた消ぬまの老の波 | 祇 | あいでそ法の道ゆくや | 阿 |

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------------|-------------|--------------|----------------|---------------|---------------|--------------|----------------|--------------|---------------|--------------|----------------|---------------|--------------|--------------|----------------|
| 行ちがふ舟もとのなき磯傳ひ | 有明の残れる月よ散紅葉 | 跡遠き水無瀬の宮は秋をき | うすのなる烟にけふも鐘なりて | 幾夜我野にふま山に明すらん | のすむ也遠きうへさを心せよ | 契まのこなを彼方に成果て | 待夜半に山のとれなる月をうま | 花もさき小萩が本の秋の風 | 消し身の心まらるゝ塚ふりて | せき入一岩根の水の音羽川 | とやくより思ひま末と年をへて | なかひれの都の山のふとの嶽 | 我庵の今夜の雨に櫻花 | 起いでん關路をいろく朝霞 | 秋ぞうき果のいろある風ならん |
| 相 | 西 | 秋 | 相 | 祇 | 孝 | 祇 | 阿 | 孝 | 祇 | 秋 | 祇 | 相 | 西 | 秋 | 孝 |
| わらくな吹ぞ山おろしの風 | うつろふ菊に霜まよう空 | 身よりむ色の夕なりけり | 行術おもへんきさめなの世や | 家路もまらし花のさく頃 | 友まらつれぬ春の厂がね | 身の半天にむびつゝぞふる | まふ跡をの霧もへだつる | 一むら薄誰まねくらん | くちすこのの有よまもかれ | かす涙の漉をみせばや | あふまーにのみ猶やすぐさん | 遠きもまるとし雪の明の | むのれん春に鳥もねどろけ | 雲まどのけ武藏野の原 | 扇ををけの露さむさ袖 |
| 賀 | 祇 | 譽 | 吟 | 賀 | 秋 | 西 | 譽 | 秋 | 相 | 吟 | 西 | 賀 | 祇 | 阿 | 祇 |

| | | | | | | | | |
|--------------|----------------|---------------|---------------|-------------|---------------|--------------|---------------|---------------|
| 更る夜の月に涙の落そひて | 身をうらの煙にむかふ里もなし | 通ひ路の清き眞砂の松のかげ | 立歸り又いにしへの君が代に | 露霜の降を宿りの月澄て | 暮ぬれの鳴音ものるさりくす | まの馴ぬ戀を心の知もうし | 一夜をも明さで歸る花のかげ | 春深き峯なる寺の開よて |
| 吟 | 祇 | 孝 | 秋 | 阿 | 本 | 鶴壽 | 吟 | 相 |
| 諸とをに只おもへきぬく | 遠き渚の海人の住庵 | ひろふをみとや言のとの末 | つらふる人やひまを得ざらん | 枯野の淺茅秋風そふく | 物れもふとや誰も聞らん | 見一斗にの名こそれいけれ | 楨立道に山かすむくれ | いのるも國のためとこそあれ |
| 相 | 西 | 祇 | 賀 | 西 | 譽 | 賀 | 祇 | 阿 |

宗祇十九 宗賀九 空吟八 宗歡十一 弘相十一 良本四
朝百十二 昭阿十 英譽五 鶴壽一 岸孝九 永賀一

右空吟の龍宮寺住持宗歡の(宗長事宗祇高弟柴屋軒ト号駿州ノ人)宗賀も宗祇弟子弘相の津役日原殿(杉次郎左衛門大内の家臣にして當時博多の町奉行に等)朝百の住吉座主の親類鶴壽の空吟弟子龍宮寺後住仁舟和尚當時十二歳なりしと云ふ此百韻の原書に享保十七年六月十八日龍宮寺火災の時焼失烏有となれり

從東至南境 五十五間 合百七間三尺五寸

常住納地料 十三貫三百五十八文 免地三貫三百九文

給分 四貫七百三文 以上二十一貫三百七拾文

大山口夫 以上四貫九百廿五文

小山口夫 以上七貫四百六拾文

普賢堂

一間一尺 地料百八拾三文 大山口夫拾文二度貳拾文

千代松 小夫錢拾貳文五度六拾文 以上貳百六拾三文

以下借家三十三戶あり人名間數地料等を記す事同前にして

錙 小路以下も又同様也普賢堂間數從東至西五十二間二尺五寸あり

錙 小路 間數從南至東廿五間四尺借家十六戶あり

外錙 小路 間數從南至東三十五間四尺五寸借家二十八戶あり

錙 板 間數從西至南三十八間大間中從南至西西門之境二十

九間五尺從西門之境至北五十三間合百二十間大間中

借家八十五戶あり

魚之町 間數從東至北六十三間五尺借家四十五戶あり

中屋 舖 間數二十二間五尺借家九戶あり
膳板浦屋舖 間數三十四間三尺借家十戶あり
毘沙門堂前 借家六戶あり

間數以上 四百六十四間

常住納地料以上 六十八貫八百五十六文

給分地料以上 拾貫四百三拾壹文

地料總以上 八拾六貫五百九拾九文

大山口夫總以上 拾七貫八百七十三文

小山口夫總以上 二十七貫九百六十七文

地料大小夫錢給分共總以上 百三拾貳貫四百三拾九文除給分

常住納地料大小夫錢合 百拾四貫六百九拾七文

住山 湖心碩鼎東堂 花押

前住 維新元命西堂 花押

此帳永錄乱後雖失之予住山之後返壁也

元龜三年十月吉日

玄熊 花押

當寺關内之事以合山衆評百姓等召出令地檢畢仍爲后規記置處如件

天文十二年癸卯仲春吉日

右碩鼎東堂の聖福寺百五世元命西堂の百七世にして此帳永録乱后云々の玄熊和尚の後に書入たるもの也

博多坊正委奴倉之事

井樓纂聞柳川藩笠間藤光撰に博多東西坊正及委奴倉云々あり之の豊前覺書元和元年立花家臣城戸清種記其父に載せ知正語及所自聞見以授其子モノナリに載せたるを引用漢文となし書たるもの故隔靴搔痒の思ひあれども参考のため之と出す博多東西坊正とあるの當時の年行司といつる如く委奴倉の撰者の説に大友

慶昌 花押
元可 花押
昌初 花押
昌吉 花押
崇壽 花押

臼杵安房守鎮慶

立花道雪丹後守鑑連

廣門 免紫上野介

大炊有馬左馬介原尻

より臼杵鎮慶と志摩郡柑子岳に居らしめ委奴郡の賦税と掌らしめ博多又有公田倉と置いて之と収貯す云々

豊前覺書

十二月朔(天正六年)方清座主悉率其臣屬妻孥入立花公(立花道雪)命先人(城戸知正)以百餘人守箱崎松林座主亦置窩堡多々真河上松崎使其臣五十人爲一團更番司瞭望嶋珍慶爲廣門使立花中畧公俄命具饌皆侍食酒再行公取長盛鍛二長刀絞飾具後豊後藤氏所作使珍慶擇佳者取之公謂珍慶曰子君與敵接壤贈巨銃十門火藥十藝珍慶辭去躬荷所賜長刀大炊請代不肯行歌曰入無所有出擁長刀至第二郭而後授從者左馬介命卒致銃並火藥至河上別而博多東西坊正言豊府委奴倉珍慶皆封之公曰恨爲珍慶所賣令追殺之博多距立花三里珍慶已入武藏城帆足彈正所守追者至遠矢原不及而還

從天慶至天正博多にて戦争津内兵火に罹りし事
文永弘安蒙古入寇の事ハ普く口碑に傳へたれども其

顛末と知る者少く況哉寛仁の刀伊人襲来の如きこれと知る人稀なるへし爰に天慶の純友追討より寛仁の異賊襲来文永弘安の蒙古入寇に至る博多へ關係ある戦鬪の状況螢蠅抄及其他諸書より之と抄録し併せて正慶以降天正に至る博多にて戦争津内兵火に罹りたる其概略と出す左の如し

純友の伊豫の掾として爲人狼戾黨を集め伊豫より起り官物を奪ひ私財を掠む贖岐介國風と戦ひ敗れて筑紫より趣き太宰府を燒き財物を奪ふ官軍小野好古等追ひ至つて博多より戦ふ純友敗走伊豫より歸る伊豫の警固使橋遠保迎討て大に破之純友を擒とし餘黨悉く誅み伏すと云ふ

扶桑略記純友追討記前略
于時賊奪取太宰府累代財物放火燒府畢寇賊部内之間官使好古引率武勇自陸地行向慶幸春實等鼓掉自海上起向筑前國博多津賊即待戰一舉欲決死生春實戰酣袒亂髮取短兵振呼入賊中恆利遠方等亦相隨遂入

左近衛少將
小野好古
左衛門尉
原慶幸
右衛門志大
藏春實

截得數多賊賊軍更乘船戰之時官軍入賊船着火燒船凶黨遂破悉就擒殺所得賊船八百餘艘中箭死傷者數百人恐官軍威入海男女不可勝斗賊徒主伴相共各離散或亡或降分散如雲純友乘扁舟逃歸伊豫國爲警固使橋遠保被擒次將等皆國々所々被捕純友得捕禁固其身於獄中死

今昔物語

天慶三年純友が討手として小野好古藤原慶幸大藏春實等を將軍とし兵船二百艘を爲て云々中略天慶三年五月彼賊等密に太宰府に至て累代の財物を奪ひ火を放ちて府を燒拂ふ其後官使好古陸路より行向ひ慶幸春實は海上より起りてちくせん博多津より向ひて合戦す云々

後一條天皇寛仁三年刀伊國賊船五十餘艘突然襲來壹岐對馬を侵し壹岐の嶋守藤原理忠を殺し筑前へ來り怡土志摩早良の海岸を乱暴し能古嶋へ移る到る處人を殺し或は虜と爲し家宅を燒き牛馬米穀を掠奪するにより太宰府の官兵及筑前の住人等之を防ぐ賊敗れて逃遁す此刀伊國といへるは女直國の事といひ或は蒙古なりと云ふ

小右記云廿五日寛仁三年四月早且惟圓來云鎮西事已無音者即歸去後

不幾來云從備中叅上者申云異國者ハ人於壹岐嶋打得其一人付兵士令
叅上者先經言上可左右敷直令叅上如何留山崎可進府解之由指旨了後
聞此事太虛言更無令叅上之者云々近代只以虛爲宗西時許惟圓持帥書
來去十六日書示異國人九日來著合戰等子細在府解又示可辭退哉否事
惟圓云使者乘隼船叅上但異國八日俄來著能古嶋同九日亂登博多津府
兵忽然不能徵發先平爲忠同爲方等爲帥首馳向合戰異國軍多被射殺不
留戰場將入船中又有弄置者又有生虜者等又奪取兵具甲冑者一船中有
五六人合戰場每人持楯前陣者持鉞次陣持太刀次陣持弓箭者箭長一尺
餘許射力太猛穿楯中人府軍被射殺者只下人也爲將軍者不被射乘馬馳
向射取只忌加不頁聲引退刀伊人ノ中有新羅國人等云々乘船遁去傍岸
掉船庫軍等依無兵船不能追擊從陸路馳行刀伊人更下船欲燒宮前官府
兵射殺前行兵一人驚乘船逃遁十日十一日北風猛烈不得還渡逗留海中
神明所爲歎兩日間府令營造兵船卅八艘令追襲賊徒遁去指本州漕去府
兵船又令廿餘艘乘勝逐之又致行朝臣調十餘艘相逐先可到壹岐對馬等
嶋限日本境可襲擊不可入新羅境之由都督所誠仰也者使者又云如只今
似被討平也賊徒甲冑兵具等少々被奪取又云從陸路令捕進刀伊國者之

管崎宮

由十六日以前所不承也者縱橫說難信受而已後聞帥使說壹岐對馬島人
等悉取載船合戰之間島人等呼云馬を馳加け天射よれく病よにたり仍
官軍等馳進射刀人遁走歸乘舟此間被取載之二島者多下從船遁來博多
津云件刀人爲體多食又多飲水馳馬以加不頁射留仁有恐怖氣者又云以
兒爲荒卷落置博多津云々食人云々此小右記ハ小野宮右大臣實資天元
ヨリ長元ニ至ル迄ノヲ筆記セラレシモノナリ

朝野群載擊取刀伊國賊徒狀
太宰府解 申請官裁事

言上刀伊國賊徒或擊取或逃却狀
右件賊船五十餘艘來着對馬島劫奪之由彼嶋去月廿八日解狀今月七日
到來即載在狀言上先了且整舟船且與軍兵警固要害所々然間壹岐島講
師常覺同七日申時叅來申云合戰之間島司及島內人民皆被殺略常覺獨
逃脫者同日襲來筑前國怡土郡經志摩早良等郡奪人物燒民宅其賊徒之
船或長十二箇尋或八九尋一艘之擻三四十許所乘五六十八二三十人擢
乃奔騰次帶弓矢負楯者七八十人許相從如此一二十隊登山絕野斬食馬
牛又屠犬肉毘嫗兒童皆悉斬殺男女怯者追取載船四五百人又所々運取

志摩郡住人
文室忠光
怡土郡住人
多治久明

穀米之類不知其數云々事出慮外要害地廣雖召人兵來未多雖整舟船勢未、雖然與所差遣兵士並彼郡住人文室忠光等合戰之場賊徒中矢者數十人或扶以載船其中追所斬首數輩兵士等中矢十餘人同八日移來同國那珂郡能古島重録在狀言上又了但彼郡人民或迷戰鬪或爲賊虜飛驒言上之前不申子細也以前少監大藏朝臣種材藤原朝臣明範散位平朝臣爲賢平朝臣爲忠前監藤原助高儀仗大藏光弘藤原友近等遣警固所令相禦同九日朝賊船襲來欲燒警固所距却之間奮呼合戰其間矢中者十餘人賊徒遂不能前戰還着能古島其後二箇日風猛波高不能相攻十一日未明同國早良郡至志摩郡船越津先是分遣精兵豫令相待同十二日酉時上陸與太神宮權檢非違使財弘延等合戰中矢之賊徒卅餘人生得二人其中一人被疵一人女少貳平朝臣致行前監種材大監藤原朝臣致孝散位爲賢同爲忠等差加兵士以船卅餘艘令攻追同十三日賊徒至肥前國松浦郡攻劫村閭爰彼國前介源知率郡內兵士合戰中矢者數十人生得者一人賊船不能追攻遂以歸却、兵船等攻戰云々又差遣救兵四十餘艘了但生虜者等皆高麗人者以通事令尋問之處申云高麗國爲禦刀伊賊遣彼邊州而還爲刀伊被獲也者其疑難決追賊之船還之後搜實誠追可言上又所擊獲首虜

并戎具等追將進上且録在狀謹解

寛仁三年四月十六日

三品帥親王

在京

正二位行中納言兼權帥藤原朝隆家
正五位下行少貳兼筑前守源朝道濟
從五位下行少貳 藤原朝臣盛規
正六位上行大典上毛野 朝臣師善
從五位下行大監 菅原朝臣雅隆
大監正六位上 大藏朝臣光順
正五位下行少監 豐嶋真人靜風
正六位上行少監 上毛野朝臣行蔭
刀伊國賊船襲來より壹岐對馬及筑前國怡土志摩早良等之被害者并掠奪せられたる生馬惣數左の如し
筑前

志摩郡人

五百四十七人

被殺害者百十二人被追取者四百三十五人 生馬七十四疋頭
早良郡人 六十四人

男二十四人 女四十人 牛十頭 馬九疋 被殺害者十九人
被追取者四十四人 被切食牛馬六疋
怡土郡人 二百六十五人

被殺害者 四十九人 男童四十三人 被追取者二百十六人 男卅八人 女童
牛馬 三十三疋 馬牛十六頭 并百七十八人
能古嶋人 九人

女六人 童三人 駝四十四疋 牛廿四頭
志岐嶋

守藤原理忠被殺害
被殺害嶋内人民 百四十八人

法師 十六人 童廿九人 女五十九人 被追取女等二百卅九人
遺留人民 三十五人 諸司九人 郡司七人

對馬島 百姓十九人
銀穴燒損了云々

被殺害人十八人 被追取人百十六人 男三十三人 童女合八十三人
上縣郡 百四十一人 童二十八人 女五十六人

被殺害人九人 被追取男女童并百卅二人 男三十九人 女童九十三人
下縣郡 男女并百七人 男三十八人 女童并六十八人
被殺害男女并百七人 被追取男女童九十八人 男三十八人 女童并六十八人
并三百八十二人 男二百二人 女童二百八十人

被燒亡人々住宅 四十五宇
爲賊徒被切喰牛馬百九十九疋頭 馬八十二疋 牛百十七疋
菊地家譜云政則對馬守後一條院御宇寬仁三年四月親父隆家帥ノ時異

賊襲來時政則若年ニシテ著紫色鎧竹笠乘白羣毛駒打望博多警固松原
防戰異賊大將討取之畢依忠功可爲九州之兵頭之由被下宣旨賜御旗賜
御歌
ツクシナル矢峯ノ嶽ノフモトコハタケサノコノ住トコソキケ

蒙古ハ北狄より起リ金を亡し宋を滅し支那を併呑國を大元と号す之
を世祖皇帝と云フ大祖五世名忽必烈尙隣境を侵略し其版圖を廣む威
勢強大にして當時外國の朝貢するもの一千餘國及ぶと云フ獨り日
本之一海水を隔て境を接し屈從せざる故屢書簡を贈り使節を渡し

元正使中須
太夫禮部侍
郎杜世忠副
奉訓郎何文
部計議回文
著都魯丁奇
撤官蕭長國
狀官高麗譯
人果將徐贊
語良將徐贊

通好和親を名とし其屬國たらしめん事を謀りたれども鎌倉の執權北條時宗拒んで之を卻け返簡だにも及ばざりし故兵力を以て壓せんと欲し軍船を催し壹岐對馬を侵し博多へ来る對馬守護代宗右馬允資國壹岐の守護代平内左衛門尉景隆共に戰死す鎮西の軍勢ハ豫て期したる事故博多宮崎邊に集り鳥飼赤坂等に戰ふ元兵其武勇の盛んなるを見勝算なきを慮り一夜突然軍を退く實に文永十一年十月廿日也翌建治元年又至り杜世忠なる者を使節とし書簡を齎らし又和好の事を申向さるも斷然容れず杜世忠及隨從の者を鎌倉に戮し爾後弘安二年元使周福等を又博多に斬る依之弘安四年大兵を起し入寇壹岐對馬を蹂躪し博多前海へ來りたれども日本兵の防戦強く遂に陸上陸なし得ざる折柄閏七月朔日颶風俄よ起り元の兵船を覆没せしめ士卒多く沈溺するにより大將分の者共ハ僅く残りし船を擇みて周章狼狽逃遁す殘る士卒ハ悉く擒となし此中于闐莫青吳万五と云る三人をゆるし此趣元主よ語れとて本國へ歸らしめ餘ハ不殘博多那珂川の邊りにて之を斬る明人の奮ける五雜俎曰元之盛時外夷朝貢スル者千餘國窮天極地罔不賓服而惟日本囑強不臣阿刺罕等率師十萬往テ征ス得返者三人耳

蓋此胡元の輕侮を卻け其來襲を禦ぎ我國家をして安泰ならしめざるハ實に北條時宗の英斷武略による來山陽云時宗之禦元崩保我天子之國足以償父祖之罪矣崩蓋以其所以恫喝趙宋者來擬於我我卻其使不納未有曲直也及彼以兵來脅屠我邊疆則曲在於彼使再來不可不執而戮之折彼凶威定我民志奪其所挾而決死待之可謂深中機宜矣否則我幾何而不爲趙宋也其後唯菊池氏之待明庶幾接武足利氏屈膝外嚮不足言已豐臣氏能不辱國體勝足利氏萬萬然至與明戰張皇太甚內自困敝雖攻守勢異不及北條氏遠矣

如是院年代記曰文永十一甲戌十月十九日蒙古來伐二十日叅鎮西博多大合戰

八幡愚童記云九國ニ馳參軍兵ハ誰々ツ少貳大友紀伊一類白木戸次松浦黨菊池原田兒玉黨以下神社佛寺司マデ我モ我モト打立タリ大將斗十萬二千餘騎都合何千萬騎ト云數ヲ不知馬氣天ニアガリテ風ヲナシ蹄足地ヲ響カシテ雷ヲナス日本ノ兵共ハ高麗唐人ニアナヅリ習タル様ニ面々分捕センズルニ御方勢ハ多ク敵兵ハ少ク如何シテ一人ニ取當ヘキ異國人十人ニ味方ハ一人コソ向フベキ者ナルニ御方勢ハ多ク

敵兵一人宛ダニ當ヌコソコソ歎ケレ味方落ケルトハ曾テ思ハズ勇バカリテ我先トソ懸出ルカソ待懸ル處ニ十月廿日蒙古船ヨリ下リ馬ニ乘旗ヲ擧責カ、ル日本ノ大將ニハ少武入道覺惠ガ孫纒ニ十二三ナル者箭合ノ爲トテヤ鏑ヲ射出シタリシニ蒙古一度ニドット咲大鼓ヲタ、キドラヲ打テ関ヲ作ルオビタ、シサニ日本ノ馬共驚キ躍ハチ狂フ程ニ馬ヲコソ刷シカ向ント云フヲ忘レ蒙古矢短ト云ドモ矢根ニ毒ヲ塗タレバナトモ當ル所毒氣ニマシ數万人矢サキヲ調テ雨ノ降如ク射ケルニ上鉾長柄物具アキ間ヲ指テハツサズ一面ニ立並テ寄者アレハ中ニシテ引退兩方端ヲマハシ合テ取籠テ皆殺ケル能振舞死スルヲバ腹ヲアケ肝ヲ取是ヲ飲元ヨリ生馬ヲ美物トスルナレバ射殺サル、馬ヲ以テ食トセリ鎧輕ク馬ニ能乘力強ク命惜マズ強盛勇猛自在無窮ニ馳引テ大將軍高キ所ニ上リ居可引肝ヲハ逃鼓ヲウチ可懸所ヲバ攻鼓ヲタ、キソレニ隨テ寄引逃ル時鉄砲ヲ飛シ暗クナシ鳴高ケレハ心ヲ迷シ膽ヲ失ヒ目クレ耳塞リテ惘然トシテ東西ヲ知ズ日本ノ軍ノ如ク相互ニ名乗合高名不覺ハ一人ヅ、ノ勝負ト思フ處ニ此合戰ハ大勢一度ニ寄合テ足手動ク處我モ我モト取附押殺シ生捕ケリ是故ニ懸入程日

本人一人トシテ漏ル者コソナカリケレ其中松浦黨多打レヌ原田一類深田ニ追入ラレテ失ニケリ日田青屋二三百騎斗ニテ引ヘタリ青屋ガ乗タル馬口強クシテ自然ニ敵陣ニツ引レタル主人入シカバ彼手ニ隨フ者共續テ懸タリケリヒシヒシト卷籠レテ殘少ク打死ス主ノ乘馬御方ノ陣ニ歸リシニコソ青屋ウタレタリトハ知レケレ山田ガ若者五人蒙古ニ追立ラレ赤坂ヲ下リニコケ兜ニ成テ逃ル處ニ蒙古二人揉ニ揉テツ追懸タルサレテ疾逃延ルコト一町餘ナリシカバ蒙古力ナクセメテノコソヤ尻ヲカキ上テ此方ニ向テツナドリケル其時山田逃武者共口惜キコソカナアノ奴原ニカク追ラル、ヨト其中ニ精兵有ケルヲ撰ミ力ヲ尽シ射當ベキニコハアラチドモ遠矢ニ射テサラバ射テミントテ南無八幡大菩薩願クバ此箭敵ニ當サセ玉ヘトテ何ニ當ドモナクシリ遣ケル程ニアヤマヲズ射落シテ日本人ハ一度ニドット笑ヘドモ蒙古音セズ手負搔具シテ逃去大菩薩ノ御爵ニアラザル外如何シテ此矢ヲハ當ベキコソ有ソト貴サト云嬉シサト云斗無リケリ蒙古次第ニツヨク勝ニ乗攻來赤坂松原ノ中ニ陣ヲ取テ居タリケル軍立思フニ違フテ面ヲ向ベキ様モナシ御方引退テ懸合者モ無リケリ爰ニ菊地次郎思切

テ百騎斗ヲ二手ニ分押寄テ散々ニ懸散シ上ニナリ下ニナリ勝負ヲ取
 家ノ子郎等多ク打レイカ、シタリケン菊池斗打漏サレ死人ノ中ヨリ
 懸出頭ドモ數多取城内ニ入シコソ名ヲ後代ニ揚シ是偏ニ大菩薩ノ祈
 念深カリシ故ナリ若勤賞有ナラバ一番ニ賜ヲラン物ヲハ八幡ニ手向
 奉ラントノ立願故關東ニ奉テ給ヘリシ甲冑ヲ面目ノ餘ニ子孫共ニ神
 恩ノ報謝ヲ思フベシトテ當社ニ持參シタリキ少貳入道ガ子息三郎左
 衛門尉景資并平四郎入道手光太郎左衛門等ヲ始トシテ寄合散々ニ戰
 フ此外大名高家我モ我モト攻シカドモ物ノ數トモセズ蒙古ヒタ破
 攻入テ今津佐原百道原赤坂迄コソ亂入タリケレ異國ノ合戰何事アラ
 ソツト安平ニ思ヒ妻子眷屬懸サズ置クヨトテ家々ニ打入テ數万人ノ
 妻子共ヲ奪取ケル分捕センズルニ御方多クシテ一人ダニ當ツカデ
 有ベキト勇斗イミシグコス、ミシニ一旦ノ戰ニアキレ騷テ云甲斐
 ナク軍已ノ刻ヨリ始シガ日モ暮方ニナリシカバアナク此方ニサヤ
 キコソ始リシテ何事カアラント怪シシニ武力及ガタケレバ水木
 城ニ引籠リ支テミント逃支度ヲコソ構ケレ是ヲ聞コソ遅ケレ我先
 ト落シカバ一人モ戰フ者ナシ少貳三郎左衛門尉景資ヲ蒙古大將軍ト

流將公劉復
 亨ノ誤也ト
 云フ

思ハシキ者長七尺許ノ大男鬚ハ臍邊マデ生下リ青鎧ニ茸毛ナル馬ニ
 乘十四五騎打連ガケ走七八十人カ程相具シオメイテ走ラカス其時景
 資ガ旗蟬口ニ鳩カケリ舞シカバ八幡大菩薩ノ御影向ト頼モンシ思ヒ
 奉リケリ究竟ノ馬乘弓ノ上手ナリシカバ逸物ノ上馬ニ乘リテ一鞭打
 テ馳見返リテ能引放ス矢一番ニ懸タル大男異中射ラレテ馬ヨリ下
 逆ニコソ落ケレ郎等共是ヲ抱ヒシメキタル紛ニコソ景資御方コ引
 返ス茸毛ノ馬ニ金作ノ鞍置馳廻リシヲ捕ヘテ後ニ尋ヌレハ蒙古コテ
 一方ノ大將流將公ガ馬ナリト蒙古ノ生捕申ケル鳩翔テ大將軍ヲバ打
 テケリ八幡降伏目出タク貴キコソナリ水木城ト申ハ前ハ深田ニテ洛一
 ツアリ後ハ野原廣ク續テ水木多ク豊ナリ馬蹄飼場ヨク兵糧潤屋アリ
 左右山間三十餘町ヲ透シテ高クキビシク築タリ城戸口ニハ磐石門ヲ
 立タリ今礎石斗ニナリニケリ南山近クテアヒ染川流レタリ右ノ山腰
 ナハ深ク廣ク堀ヲホリ二三里廻レリ昔神功皇后土與國大人ヲ禦給テ
 トテ一夜ノ中ニコシラヘ給フ城ナレハ神力ノ致ス所凡夫ノウザトハ
 見エザリケリ縱穆天子驂騞駟ガ蹄モ曾テ是ヲ越ガタシ縱勝軍王ガ
 名將勇士ノ猛モ争カ是ヲ破ルベキ誠ニユレシキ城ナレドモ博多宮崎

少貳豐前守
資能刺髮シ
テ覺惠ト号

打拾テ多クノ大勢一日ノ軍ニ堪兼テ落ルヲ奈何セシ何事ヲナスベキ
グヤトアヤシノ民ニ至マテ泣歎カヌハナカリケリツカノ間モ惜キ命
トテ妻子ヲ引具シ老幼ヲ扶ケ何地トモナク落行シガ中有ノ旅ニ迷フ
モカクヤト悲シミケル宮崎宮留主ヲ始トシテ僧侶社官固ノタリシガ
ドモ憑所ノ軍兵落スル上ハ角ヲモイカニ有ベキ縱身ヲ還ルト云トモ
神體ヲ捨奉リ忽敵ニケガサセシコノ悲シケレ命アル限リ何クヘモ
カ、ケ仰奉ントテ朱漆の唐櫃ニ三所神體ヲ移シ奉リナクナク宮ヲ出
ル間餘リ火急ノコナレバ神輿ニマコモ乗奉ラザリシコソ目モ心モ及
ハレテ御供ノ留主左衛門尉定重平左衛門尉景親同景康圖書允定秀以
下ノ被官共少々參テケリ宇美宮ト急ク處ニ彼ハヤ一人モナク先ヨリ
落テ扉ヲ閉立入ベキ様モナシ上山ノ極樂寺ニツ入奉ル所節雨降涙添
テ衣手スレヌ處ゾナカリケル逃ツル跡ヲ願レバ在々所々狂火オビタ
タシク燃上リシカバ是偏ニ敵ノウザト恐レ思ハレテ云斗ナシ此ノ嶺
彼ノ谷ニ隠レタル落人共夜明押寄搜サレ何方ヘカ今一マト逃ベキト
悲ミケルカ、ル最中ナレドモ如何ナル者カハシタリケン三首ノ歌ヲ
詠ミテタツ少貳入道覺惠事ヲ 臆病チイカニハ少貳入道ガ耻ヲカク

エノ名ニ落ニケリ大友頼康ヲ 大友ハ子共ウチツレ落行テ方々ニコ
ソヨリヤスミケレ宮崎留主子息紅葉ヲ綴タル直垂ヲ着テ落ケルヲ
直垂ニ縫紅葉バモ落ニケリハゲシキアダヤ木枯ノ風サル程ニ夜モ明
レハ二十一日朝海面ヲ見ヤルニ蒙古船一艘モナク皆々馳歸ケリ是ヲ
見テコハ何事ソ今日九國ニ充滿タル人種ナク皆亡シナントコソ終夜
歎明シツルコ何トテ角ハ歸ラン只ゴトニモ覺ヌアリ様カナトテ泣笑
色出人心コソ付ニケレ異國船一艘志賀嶋ニ懸テ逃ヤラテ有シニモ餘
リ恐テ左右ナク向フ者コソナカリケレ蒙古ガ方ヨリ手ヲ合テ云ケレ
トモ我行ントモ云ザリケリ助船ヲ寄ヌハ降ヲ免サヌニコソト思切テ
其中ノ大將海ニ入失ニケル歩兵共ハ御方ノ地ニ渡リ著弓箭ヲ失兜ヲ
脱其時我モ我モト押寄テ高名ニシテ生捕ケル水木岸前ニ引並ヘテ百
二十人斬レケル

附言此八幡愚童記ハ八幡宮及ビ諸神ノ神徳ヲ稱揚シ菊池河野等ガ
戦功ヲ立タルモ文永ニ蒙古兵ノ退去セシ弘安ノ颯風異艦ヲ覆没セ
シメタルガ如キ渾テ之ヲ神助ナリトシ専ラ日本兵ノ怯弱ナル狀ヲ
言ヒ全ク神力ニヨツテ異賊ヲ掃壞セシ如ク書ク甚信ズヘカラサレ

石城遺蹟上

元都元師忽
敦右副左帥
洪茶丘復亭
元帥劉使
高麗都督使
金方慶兵馬
軍使子亮使
軍使金亮使

トモ如何ニセシ他ニ當時ノ事蹟ヲ詳記セルモノナク一代要記ニモ
太宰府軍皆敗北夜將半有兵艦二艘暗中擊賊走之是神明之所爲也云
々蒙古寇記辨之曰邦俗崇信鬼神最甚是以道釋巫祝之徒好談荒怪奇
譎之事以眩惑庸流如要記愚童記云々亦皆欲歸功於鬼神使人愈固其
崇信之心而於諸將防禦之事則却疎略之動輒言其致敗走不亦冤乎此
文永ニ蒙古兵ノ俄然退去セシ事大橋訥菴ノ元寇紀略ニ曰既而日晚
〔文永十一年十月二十日〕賊亦疲箭盡還登舟金方慶謂忽敦洪茶丘曰我
兵雖少已入敵境人自爲戰即孟明焚舟淮陰背水也請復決戰忽敦曰小
敵之堅大敵之擒策瘦兵戰大敵非完計也不若班軍劉復亨傷頗重先引
兵還是夜大風雨賊船觸巖岬多破金亮墮水死於是全軍亦乘夜遁去云
々初賊軍ノ發スル蒙古軍一万五千高麗八千合二万三千而不還者一
万三千五百餘人也トアレバ所殺過半其日本兵ノ勇鬪激烈ナリシヲ
推テ可知也又弘安ニ至ツテハ文永ノ時ヨリ數倍ノ大軍ニシテ七月
上旬ニ博多前海ニ來ルモ左右ナク上陸ナシ得ザルノミナラス遊ノ
沖鷹嶋ヘコソ漕寄ケルト八幡愚童記ニ記セルヲ見テモ日本兵ノ防
戰強ク其鋒先ヲ避タルヲ勿論ニシテ如此ナルトキハ假令颶風ノ倏

世界村圖
編作世加松
下見林云志
賀島也ト大
明浦或ハ云
フ志賀大明
神鎮座大明
ナルヲ以テ
大明浦トス

倅ナキモ其勝敗元ヨリ不可圖也東國通鑑曰五月戊戌忻都茶丘及金
方慶朴球金周鼎等以舟師征日本辛酉忻都茶丘金方慶至日本世界村
大明浦使通事金時檄諭之金周鼎先與倭交鋒諸軍皆下テ與ニ戰テ良
將康彦康師子等死之諸軍向一岐嶋船軍一百十三人梢ニ三十六人遭
風失其所之遣郎將柳庇告于元又六月金方慶金周鼎朴球朴子亮荆萬
戶等與日本兵力戰斬首三百餘級日本兵突進官軍潰茶丘乘馬走萬戶
復橫ヨリ擊之斬首五十餘級日本兵乃退茶丘僅免翌日復戰敗績云々
忻都茶丘等累戰失利云々此中官軍潰トシ又累戰失利トアレバ防戰
手強ク度々敗北セシヲ明了クレドモ是等ノ事却テ我邦ノ史典ニ載
セズ實ニ千載ノ遺憾ト可謂也又元史ノ五龍山八幡愚童記ノ鷹島共
ニ玄界島也ト云ヒ或ハ五龍山ハ大呂ノ島ニシテ鷹島ハ肥前鷹島ノ
事ナリトモ云フ又北肥戰志ナルモノニ文永十一年ノ入寇以前同二
年博多ヘ蒙古ノ襲來セシヲ記シ鎮西要略ニモ弘安四年ノ入寇後
同七年蒙古筑前海ニ來リシヲ記ス此前後來襲ノヲ信シガキ事
ナレドモ因ニ之ヲ出ス左ノ如シ
北肥戰志云龜山院ノ御宇文永二年乙丑蒙古數千艘其勢三百七十六

北肥戰志

万人八月十三日筑前國博多ノ津ニ襲來ス鎮西大ニ騷動シ九國ノ士卒皆馳集リ蒙古ト相戦ツニ異敵蟻ノ如ク見ヘテ防戦中々難叶味方悉ク中國へ引退シ蒙古勝ニ乗博多箱崎ノ陸地へ上リ既ニ千手秋月ノ邊迄押來シニ原田ノ次郎ト秋月九郎ガ軍兵共山中へ隠レ居テ或ハ鬼面或ハ獅子頭等青黄赤白黒ニ異形ヲ異似テアソコノ木蔭コノ叢ヨリ現レ出烈シク打戦シ程ニ異賊是ハ正シク神軍ヨト膽ヲ消シ皆逃去數百万ノ者共自然ト船ヲ返シ不殘高麗へ販リヌ云々
鎮西要略云弘安七年蒙古船師來於筑前海亂入湊而燒博多民家警固武士擊而走之云々

竹崎五郎繪詞云れきのとま沖の濱「よくんひやうそのうをしらせうちたつすゑなが、一もんの人々あまゝあるなうにゑたれ又太郎ひで家ことに申うけ給とるによりてうぶとをきうへてあれをまゑるしにてあひたがひにみつぐべきよしを申すところにいぞくわうき「赤坂」にちんをとるにつきて一もんの人々あひひうふまたいーせうぐんださいのせう又三郎さへもんうけすけのたの三郎二郎すけーげをもてゑとの又太郎ひでゑのもとにけんさんいゑ候し時一まよにてかせ

ん候べきよし申候きあかさか馬のあしたちゑるく候まれにひかへ候ひ、さだめてよせきたり候んせらん一とうまのけてをものいにいるべきよし申さる、につきてけんまちのやくそくをたがへしとてかのくひかへしあいだしいしやきをあいまゝばいくさをろかるべきやせに一もんのなかにてすゑながひでのくにのさきをかけ候んんと申てうちいせ給とゑた「博多」のちんをうちいてひでのくにしゑゑよ一ばんとぞんトすみよし「住吉」とり井たまゑをすきこまつばらをうちとを置てあうさゑにとやむふところよあしげあるむまにむらさきさゑおもだゑのよろひにくれなひのはろかけさるむしやそのせい百よたばうりとゑゑてけうとのちんをかけやぶりぞくとをひかとしてくび二たちとなぎなとのさきつらぬきてさうまも今せてまゑとゆしくみゑしにたれにてゑさらせ給候ぞすゑくこそ見ゑ候へと申にひでのくにきくちれ二郎たけふさと申すものに候かくおせられ候いたれぞとふをなトきうちたけさきの五郎ひやうゑすゑあがかけ候御らん候へと申てとせむらう給たけふさにうとあかさかのちんをかけおとされてふゑてふなりてねはせいすそいらふむきてひく

せいはべふのつかひらへひくはらよりとりかひの(鳥飼)まやひ
 がたをおほせむになりあひひとひくををかくるまひまひがよとせ
 たのしてろのかたきをのばすけうとひするのらにちんをとりに
 のとたをさてあらべらんまやうひまきくしてひしめきあふするな
 がせせむふをとらけんだすけみは申す御かたのつゝき候はん御ま
 ち候てせう人をさて、御うせん候へと申をさうせんのみちさきを
 てまやうとすた、うけよとてを先いてかくけうとすそのらよりとり
 がひがたのまやのまつのもとにむけあひせてかせんす一ばんまは
 たさしむまをいられてとねをとさるすゑながいげ三きいたてをひむ
 まいられてとねしとろにひせんの國の御け人まらいしの六郎みち
 やすぢちんより大せいにてあけしよもこのいくさひきまりぞきて
 すろのらまあがるむまもいられせしてゐてきのなりまうけいりみち
 やすつ、うざりせのまぬべりしみなりおもひのやうにぞんめいし
 てたがひにせう人よつちくごのくにの御けよんまの又二郎
 くびのやねをゐとをさるおなしくせう人になつといよのかの、六郎
 通有(生年三十二以下繪傍在)みちあまればちやくしあいの、八郎通忠豊

後國守護大友兵庫頭頼泰之手軍兵肥後國竹崎五郎兵衛尉季長(生年二
 十九)三井三郎資長(季長姉甥)三郎次郎資安白石六郎通泰其勢百餘騎後
 陣よりうく以下略

文永蒙古入寇の後蒙古征伐の事有て左に出す處の古文書に異國發向
 云々水主梶取等博多へ送遣云々此事を載たり一説に北條實政此軍を
 帥ひ渡海出征せしといひ或は此舉全く内國人の勇氣を奮起せしむる
 一時の方便又出さるものにて出兵せしむ非すといひ實際最分明なら
 老既に元寇紀略にも元史東國通鑑等々引き之を半信半疑の間に置け
 り曰建治元年十二月北條時宗令西海將士曰明年春將發兵征蒙古宜修
 戰艦備器械簡水主元寇始末曰當時記載簡略此事僅存于古簡未聞發兵
 征海外豈不果討邪東國通鑑云至元十七年倭賊入固城漆浦遣大將軍韓希
 愈防守海隅又選忽赤巡馬諸領府二百人分守于慶尙全羅道倭賊又寇合
 浦乃遣大將軍印侯郎將池瑄告于元元史高麗傳云十九年以日本寇其邊
 海郡邑燒居室掠子女而去請發蒙古軍五百人戍金州又月魯不花傳云爲
 山南道廉訪使浮海北而往道阻還抵鐵山遇倭賊船甚衆乃挾同舟人力戰

拒之倭賊給言投降弗納於是賊即登舟擣月魯不花令拜伏月魯不花罵云
吾朝廷重臣寧爲賊拜耶遂遇害同舟死者八十餘人其或在是時乎
東寺文書

明年三月頃可被征伐異國也擣取冰主等鎮西若令不足者可省宛山陰山
陽南海道之由被仰太宰少貳經資了安藝國海邊知行之地頭御家人本所
一圓地等兼日儲儲擣取水主等經資令相觸者守彼配分之員數早速可令
送遣博多也者依仰執達如件

建治元年十二月八日

武藏守 義政 在判
相摸守 時宗 在判

武田五郎次郎 信時 殿

野上文書

異國發向用意條々

一所領分限領内大小船 呂數 水主擣取交代年齡可被注申兼又以來月中
旬送付博多津之樣可相携事
一渡異國之時可相具上下人數年齡兵具可致注申事
以前條々且致其用意且今月廿日以前可令注申給若及過避者可致行重

科之由其沙汰候也仍執達如件

建治二年三月五日

前出羽守 花押

野上太郎 資直 殿

關東評定傳云弘安二年六月廿五日大元將軍夏貴范文虎使周福樂忠相
具渡宋僧本曉房靈果通事陳光等若岸牒狀之旨等如前々於博多斬首又
北條九代記保曆間記ニアリ

元享釋書祖元傳云弘安四年春正月平帥時宗來謁元采筆書呈帥曰莫煩
腦帥曰莫煩腦何事元曰春夏之間博多擾騷而一風纔起萬艦掃蕩願公不
爲慮也果海崩百萬寇鎮西風浪俄來一時破沒云々
八幡愚童記云弘安四年ノ頃蒙古ハ大唐高麗已下ノ國々ノ者共テ駭具
シ三千餘艘ノ大船ニ數千萬人乗列テコソ來リケル其中ニ高麗ノ兵船
五百艘壹岐對馬ニ上テ見合者ヲハ打殺ス人民堪兼テ妻子ヲ引具シ深
山ニ逃籠ル處ニ赤子ノ鳴聲ヲ聞付テ押寄殺ケル程ニ片時ノ命惜ケレ
ハサシモニ愛スル嬰兒ヲ我ト泣々差殺シテソ隠レケル失子親斗イッ
迄アラソ命ツト身ナガラウツテソ泣歎心中タイカニセソ世中ニ糸

惜キ物ハ子ナリケリ其ニマサルハ我身ナリケリト讀置シ人ノスサヒ
 ナ今ツシル高麗ノ船ハ宗像ノ澳ニヨル蒙古大唐ノ船共ハ對馬ニハヨ
 ラズ壹岐嶋ニツキ夫ヨリ宮崎ノ前ナル能古志賀ノ二嶋コツ若ケル是
 ナ見テ高麗船ハ宗像ヨリ押出蒙古ノ船ト一所ニヨル今度ハ一定可勝
 トテ可居住世路具足耕作ノ爲トテ鋤鋌マテ持タリケル蒙古寄タリト
 鳴ヨリ博多ニ告タルハ夜中ノ事ニハアリ周章騒匈呼東西南北馳集兵
 オビタシ元ヨリ海端ニ數百町石築地ヲ面キウニ一丈ヨリ高此方ハ
 ノベニシテ馬ニ乗ナガラ馳上リ賊船ヲ見下テサケ箭ニ射ル様コツ誘
 タル其上ニ火ヲ燒城口キビシク搆タリ關東ヨリモ秋田城次郎以下大
 勢下リツドヒ九國二嶋ノ兵共神社佛寺ノ輩迄我モ我モト馳來箭サキ
 ナ調相待トイヘドモ兵糧米乏シクテ力盡鎧重ク魂モ身ニソハメ心地
 シテ弓ヲ引ベキ様モナシ文永ノ合戦ニ手程ハミツ叶マシク思ハレ
 ケルサレト神明ノ御扶ニテ勝事アラハ勲賞蒙ント思フ心ヲ先トシテ
 拔々ニコソ志賀嶋ニ浮ビケル先一番ニ草野次郎二艘ニテ夜打ニ寄テ
 異賊船一艘ニ乗移二十一人ガ首ヲ取船ニ火ヲ懸テコソ歸ケレ其後
 用心シテ船ヲ鑿合押マツシテ守護シ寄者アレバ大船ヨリ石弓ヲシマス

蒙古寇記曰

鎮西海上七

八月間大風

將起海鳴山

震其響鐘鏑

龍登虹現其

氣腥臊或霧

陰晝晦或霧

蒸流朱或密

ニ日本船小クシテ打破ラレズト云コトナシ死スル者十ガ八九生ル者
 ハ稀ナリ前後疊チ征スル者千万人行テ獨歸ルコトナシ見ヘシカバ此事
 詮ナシ人種アルベカラズ心々ニ寄ベカラズ夜討ヲ止合戦ノ次第評定
 アルベシトツ觸ラレケルサレドモ猶止ズ伊豫國住人河野六郎通宗異
 賊警固ノ爲本國ヲ立シ時十年中蒙古寄來ラズハ異國ニ渡テ合戦スヘ
 シト起請文十枚マデ書氏神三島社ニシテ灰ニ燒テ自飲ナドシテ此八
 ケ年マデ相待處其時節ヲ得是身ノ幸ニ非ズヤト勇テ兵船二艘ヲ以テ
 押寄タリシ程ニ蒙古放ツ矢ニ究竟ノ郎等四五人射臥ラレ憑所ノ伯叔
 サヘ手負臥テ我身モ石弓ニ左ノ肩ヲツヨク打レ弓ヲ引ベキニモ及バ
 ナハ片手ニ太刀ヲ拔モテ帆柱折テ蒙古ノ船ニ指カケ思切テ乗移散々
 ニ切廻多クノ敵ノ首共トリ其中大將軍ト覺ヘ玉冠キタリケル者ヲ生
 捕テツノ前ニシメツケテ歸ケル大友嫡子藏人ハ三十騎斗ニテ洲崎
 ナ傳テ責寄戰頭一取歸ケルカクシテ後九國ノ者已ニ度々合戦ニ及ヌ
 關東ノ武士達手ナミノ程ヲ見給ヘト勸ラレ城次郎ガ手ノ者新左近十
 郎今井彦次郎財部九郎伯父甥押寄散々ニ戰命ヲ限リニ振廻打死シテ
 失ニケリ其後蒙古遙ノ澳鷹島ヘコソ漕寄ケル按此合戦七月六日ヨリ

雲橫馳或電
雷閃轟種種
變幻有不可
得而形容者
矣土俗見之
輒爲異兆而
將繩索乘屋
宇室窳隙因
厲戶以其風
騰備未曾爲
異也元賊之
來偶始值此
宜矣其驚愕
恐怖也世謂
此等事爲神
軍誣妄甚矣

十三日ニ至ル八箇日間也
八幡惡童記云十日餘リノ頃西國ノ早馬若テ申ケルハ去七月晦日夜半
ヨリ乾風オビタリシク吹テ閏七月一日賊船悉ク漂蕩シテ海ニ沈ミ亦
大將軍ノ船ハ風ヨリ以前青龍海ヨリ頭ヲ指出シ硫黃ノ香虚空ニ滿々
テ異類異形ノ者共眼ニ遮リシニ恐テ逃去ヌ殘ル處ノ船共ハ皆破テ磯
ニ打上ラレオキニ漂テ算ヲ散スニ異ナラス死人多ク重テ島ヲ築ニ相
似タリ鷹島ニ打上ラレタル異賊數千人船ナクシテ疲レ居タリシカハ
破船共ヲツクロヒテ七八艘ニ蒙古高麗人ハ大略乘テ逃モドルヲ見テ
鎮西ノ軍兵共小貳三郎左衛門尉景資大將軍トシテ數百艘押寄タリシ
カハ異國人共船ガアラハ逃モセメ今角トテ命ヲタハス散々ニ戰ヒ
ツ組テ海ニ入テ指違テ死スルモアリ落重テ首ヲトリ射フセ切伏打フ
セテモ勝負ナス敵モ味方モ不知數被討ケル敵千餘人殘リシカハ平ニ
降ヲ乞ケルカサノミイケテモ無益ナリトテ中河ノ端ニテ首ヲキル始
ハカウニ懸リシガ後ニハ打積テ置唐人共ノ中ニハ少々生捕ノアル由
ヲ披露セシ時ニコソ京都關東モ靜テ上下ノ人々色直ケル
元史至元十八年范文虎忻都洪茶丘等喪全師以還乃言至日本欲攻太宰

八角島博多

府暴風破舟猶欲議萬戶厲德彪招討王國佐水手總管陸文政等不聽節制
輒逃去本省載餘軍至合浦散遣還鄉里未幾敗卒干闥脫歸言官軍六月入
海七月至平壺島移五龍山八月一日風破舟五日文虎等諸將各自擇堅好
船乘之棄士卒十餘萬于山下衆議推張百戶者爲主帥號之曰張總管聽其
約束方伐木作舟欲還七日日本人來戰盡死餘二萬爲其虜去九日至八
角島盡殺蒙古高麗漢人謂新附軍爲唐人不殺而奴之闔輩是也蓋行省官
議事不相下故棄軍歸久之莫肯與吳萬五者亦逃還十萬之衆得還者三人
耳元寇紀略曰按元史日本傳曰十萬之衆得返者三人耳續通鑑綱目曰得
還財三人蓋言范文虎所率蠻軍十餘萬中干闥莫肯與吳萬五三人逃還耳
非言元兵得生還者止三人也而諸書多以三人爲元軍生還者之總數大誤
云々

外交志稿戰爭編云外務省藏版龜山天皇文永五年戊辰二月高麗王植蒙
古ノ爲メニ其臣起居舍人潘阜等ヲ遣シ太宰府へ來リ國書方物並蒙古
ノ書ヲ上ル府司驛ヲ馳セテ幕府ニ進ム蒙古ノ書ニ曰大蒙古國皇帝書
ヲ日本國王ニ奉ス朕惟ルニ古ヨリ小國ノ君境土相接スル者ハ信ヲ講
シ睦ヲ修ムルヲ務ム況ンヤ我祖宗天ノ明命ヲ受奄ニ區夏ヲ有テ遼方

異域威ニ畏レ徳ニ懷ク者數フ可ラズ朕即位ノ初高麗無辜ノ民久シク
 鉞鑕ニ瘁ムヲ憫ミ即チ令シテ兵ヲ罷メシメ其疆域ヲ還シ其旄倪ヲ反
 へス高麗威威シテ來朝ス義ハ君臣ト雖ヒ歡ヒ猶父子ノ如シ計ルコ貴
 國モ亦既ニ之ヲ知ノ高麗ハ即チ朕ノ東藩ナリ貴國之ニ密邇シ開國以
 來時ニ中國ニ通ズ朕ノ躬ニ至テ曾テ一乘ノ使ヲ以テ和好ヲ通ズル無
 シ恐クハ貴國之ヲ知ノ未ダ審カナラザルコトヲ故ニ特使ヲ遣リ書ヲ
 持シ朕ノ志ヲ告グ冀クハ自今以往問ヲ通フ好ヲ結ビ以テ相親睦セン
 且聖人四海ヲ以テ一家トナス好ミノ相通セザル豈一家ノ理ナラシヤ
 兵ヲ用フルニ至ツテハ其レ孰レカ好ム所ナラシヤ王之ヲ圖レト幕府
 執權相揆守北條時宗以聞ス廷議公卿ニ詔シテ答書ヲ草セシム時宗蒙
 古ノ書辭不遜ナルヲ以テ更ニ妻請シテコレヲ罷メ太宰府ニ令シテ使
 者ヲ放逐ス使者沿海要害ノ處ヲ偵伺シテ去ル四月權大納言藤原通雅
 ナ伊勢大廟ニ遣ハシ宸筆宣命書及ヒ幣物ヲ奉シ並ニ使ヲ諸陵諸社ニ
 派遣シ蒙古ノ難ヲ告グ六年己巳春蒙古兵部侍郎黑的殷弘等對馬ニ來
 リ報書ヲ求ム島司拒ンテ納レズ黑的等の島民塔次郎彌次郎ヲ以テ去ル
 九月高麗又蒙古ノ爲メニ其臣金有成高柔等ヲ遣ハシ國書及ヒ蒙古ノ

任ハ日

書ヲ奉ス太宰府之ヲ卻シ初メ塔次郎等捕ハレテ蒙古ニ至ル蒙古ノ主
 其來ルヲ悦ビ之ヲ見テ曰汝ノ國中華ニ朝覲スル來ル尙シ今朕汝ノ國
 ナシテ來朝セシメントスルハ敢テ逼ルニアラズ唯名ヲ後昆ニ垂ルヲ
 欲スルノミト温言之ヲ待チ厚ク物ヲ給シ城闕宮殿ヲ歷觀セシメテ遣
 歸ス是ニ至テ二人使者ト俱ニ對馬ニ至ル八年辛未九月敕シテ西陲ノ
 守備ヲ警ム十月蒙古船一百餘人ヲ載セ筑紫ニ來ル警吏之ヲ報ス太宰
 少貳武藤資能兵ヲ聚テ之ヲ拒ントス既ニシテ其軍鑑ニアラザルヲ以
 テ兵ヲ撤シテ之ヲ待ツ蒙古牒使秘書監趙良弼書狀官張鐸等高麗使康
 允紹ヲ以テ先導ト爲レ來テ書ヲ府應ニ呈ス其書櫃ニ藏メ金鎖之ヲ封
 ズ資能來由ヲ問テ之ヲ披閱スルヲ求ム良弼肯セズ乃關東ニ傳致セン
 一ヲ請フ又可カズ曰ク我皇帝嘗テ書ヲ寄スル數次ニシテ皆報ナシ之
 ナ以テ余ヲシテ特ニ使セシム是書直チニ日本國王ニ呈セヨ然ラザレ
 ハ其將軍ニ致セ若シ拒テ容レザルハ疾ク奉持シテ歸レト詔旨斯ノ
 如シ故ニ須臾壬子手ヲ放ツ能ハズト資能其使ヲシテ直ニ帝闕ニ詣ラシ
 ム可ラザルヲ以テ固ク執テ許サズ是ニ於テ良弼案書一通ヲ贖テ之ヲ
 授ク其略ニ云王者本ト外ナシ高麗既ニ一家トナル貴國實ニ隣境タル

ヲ以テ嘗テ信使ヲ遣リ好ミテ修メシム而テ貴國遂ニ答フル所アラズ
 故ニ復々特使趙良弼ヲシテ促サシム貴國答使ヲ發セハ是ト俱ニ來レ
 仁ニ親ヅキ隣ニ善スルハ國ノ美事トス若シ或ハ猶豫セハ兵ヲ用ルニ
 至ラソ敢テ好ム所ニアラズト此行蒙古ノ意必答書ヲ得ント欲シ十一
 月ヲ以テ期トナス太宰府之ヲ鎌倉ニ報シテ進止ヲ取ル北條時宗以聞
 ス又報セズ之ヲ放逐ス十二月權中納言藤原公守ヲシテ再ビ蒙古ノ難
 ナ伊勢大廟ニ告グシム九年壬申五月蒙古張鐸高麗ノ書ヲ持シ來ル又
 之ヲ卻ク十年癸酉六月蒙古復々趙良弼ヲ遣ハス太宰府又之ヲ放逐ス
 文永十一年甲戌十月蒙古都元帥忽敦副元帥洪茶丘等船艦九百餘艘蒙
 漢軍一万五千高麗兵八千ヲ帥ヒ來リ對馬佐須浦ニ寇ス守護代右馬允
 宗助國其族ヲ以テ之ヲ禦少射テ賊ノ一將ヲ斃ス然レモ衆寡敵セズ助
 國以下悉ク戰沒シ賊入テ對馬ニ屯ス尋テ壹岐ニ寇ス守護代平景隆力
 戰シテ死ス賊二島ニ據テ掠奪ヲ縱ニシ男子少長トナク之ヲ殺シ或ハ
 婦女ノ從ハザル者ヲ執ヘ掌ヲ穿テ索ヲ貫キ之ヲ舩ニ縛ス慘毒至ラ
 ザル所ナシ既ニシテ肥前松浦ヲ侵シ進テ太宰府ニ逼リ宮崎祠ヲ燒キ
 今津佐原ヲ劫掠ス太宰少貳景資苦戰シテ其一將ヲ獲我兵利アラズ明

日忽然風雨ノ起ルニ會フ賊船漂沒スル者二百餘艘餘衆宵遁ル黎明鎮
 西ノ兵之ヲ追擊シ戰艦一艘ヲ奪ヒ一百二十級ヲ賊ス十一月幣ヲ諸大
 社ニ奉リ國安ヲ禱ラシム後宇多天皇建治元年乙亥四月元主忽必烈其
 臣禮部侍郎杜世忠兵部侍郎何文著計議官撒都魯丁等國書ヲ齎シ太宰
 府ニ來リ重テ修好ヲ望ム高麗譯語郎將徐贊等之ニ從フ九月北條時宗
 召テ之ヲ鎌倉ニ檣致シ其無禮ヲ誚メ世忠等五人ヲ龍ノ口ニ斬ル是月
 時宗奏シテ公私ノ費用ヲ減省シ權リニ京師ノ大番兵ヲ停メ武幹ノ士
 ナ選ミテ鎮西ニ分遣シ沿海諸州ノ防備ヲ嚴コシ十一月北條實政ヲ以
 テ筑紫ノ探題ト爲ス是月又幣ヲ柏原ノ陵ニ獻ス二年丙子閏三月孔雀
 經法ヲ修メテ元寇ヲ穰ハシム三年丁丑正月又使ヲ諸社ニ遣リ元寇ヲ
 弭ソフヲ祈ル弘安二年巳卯六月元將夏貴范文虎等其部將周福樂忠譯
 語陳光及僧健果等ヲシテ書ヲ持シ大宰府ニ來リ通交ノ利害ヲ説シム
 時宗又府司ニ令シテ之ヲ博多ニ劄ス十月時宗關東ノ將士ヲ募リ又鎮
 西ノ戍ヲ増ス四年辛巳元主忽必烈我其使ヲ刑スルヲ聞テ怒リコ禁ヘ
 ズ兵力ヲ以テ壓セント欲シ五月其將范文虎忻都洪茶丘ヲ遣ハシ入寇
 ス兵凡十餘万高麗ノ將金方慶等兵二万五千糧十万石但シ船艦數千艘

海ヲ蔽フテ來ル大宰府之ヲ壹岐對馬ニ防シ利アラズ益兵ヲ諸道ニ徵
シ鎮西ニ會セシム既ニテ敗聞頻ニ京師ニ踵ル廷議ニ上皇ヲ鎌倉ニ
奉シ東兵ヲシテ京師ヲ護ラシメントス龜山上皇深ク之ヲ憂ヒ親ラ石
清水宮ニ禱リ尋テ春日社及ヒ日吉社ニ幸シ又手書數文ヲ伊勢太廟ニ
呈シ身ヲ以テ國難ニ代ルヲ告ク時ニ各道ノ神祠佛刹大小トナシ戰勝
ヲ祈ラザル莫シ六月賊五龍山及ヒ能古志賀ノ二島ニ據テ平壺ニ薄ル
鎮西ノ探題北條實政兵ヲ督シテ塙ヲ海岸ニ築キ延袤數百町高サ丈餘
弓手ヲ布置シ賊ニ臨テ之ヲ守ル賊敢テ近ク者莫シ我勇士草野七郎夜
襲シ賊船一艘ヲ燒キテ自ラ二十餘人ヲ殺ス賊鉄鑼ヲ以テ巨艦ヲ聯テ
弩ヲ外面ニ設ケテ守備ヲ戒ム我軍之ヲ攻レドモ船皆脆弱礮石ニ摧破
セラレ死傷甚多シ河野通有輕舸ヲ以テ挺前ス弓弩亂發部下多ク死シ
身モ亦左肩ニ傷ツト雖益勇ヲ勵ミテ撓マズ然レモ賊艦高大礮ハカ
ラズ便テ櫓ヲ倒シテ之ニ架シ身ヲ躍シテ登リ賊數十人ヲ殺シ其一將
ヲ崩シ去ル大友貞親秋田城次郎及ヒ九州ノ兵相繼テ進ミ殊死血戰
シテ各獲ル所多シ是ニ於テ賊鋒漸ク阻ミ北シテ鷹島ヲ保ツ巨帥范文
虎大ニ畏怖シ單艇衆ニ先テ遁ル七月晦颶風俄カニ西北ヨリ起リ海水

簸揚シ崩艦皆破レ溺没スル者算ナク積屍浦口ニ塞リ海中歩シテ行ク
ベシ敗兵數千猶鷹島ニアリ壞船ヲ繕修シ將ニ逃歸セントス少武景資
鎮西ノ兵ヲ指揮シ擊テ之ヲ殲クシ降虜一千餘人之ヲ博多ニ斬リ特ニ
其三人ヲ釋シテ本國ニ放還シ狀ヲ其主ニ報セシム

正慶二年菊池寂阿探題北條英時と戦ひ一より以降博多まで戦争あり
し事諸書に載る處左の如く數回あれども此中或ハ津内よりさる接
近郡地の戦ひをも之を博多とせしものあらん或ハ訛傳もあるべく
又ハ洩たるもあるべしかく度々戦争あり故津内兵火は罹リ一事も
亦屢めて天正十四年より終に人家悉皆焼亡せし也

博多日記に正慶二年三月十三日菊池寂阿探題北條英時を討んとし博
多大射馬場にて戦死す此菊池戦死の地博多なる事ハ菊池軍記葉室親
善の訴狀等其他諸書之を載たり

鎮西要略に延文元年直氏探題一色宮内少輔到博多戰原田彈正之兵云々
南山史ニ文中二年北朝應安六年癸丑夏五月菊池武政今川貞世と戰于
水島走之秋七月武政又貞世と戰于博多敗之云々

北肥戰志、應永三十年癸卯五月太宰新小貳滿貞千葉介胤鎮と軍兵を合せ探題澁川義俊の博多の城を攻む義俊家人坂倉上総介以下の者共防ぎ戦ひ打負けて義俊を初城兵悉く落去る云々

九州軍記、永享四年壬子六月十五日博多祇園祭禮の際小貳三原の兵と原田の兵と突然鬪争を仕出し小貳三原方死する者五十餘人原田方死人廿人手負五十人に及ぶ云々

稱名寺舊記、永享五年癸丑十二月晦日の夜大内と小貳と合戦せし時稱名寺へ乱入手々松明を取捨たるを以稱名寺々中悉く焼失す云々
大内實錄、明應六年丁巳三月十三日大内義興の兵博多聖福寺門前と戦ふ云々

大内實錄、天文二年癸巳太宰小貳資元高祖より出て多々瓦筥崎博多鳥飼小田の間に逆戦す陶道驍撃之を破る云々

聖福寺舊記、永祿六年癸亥の兵火、罹り焼失の後七年にして再建せしも天正九年辛巳又兵火に罹る由を記せり

九州軍記、永祿十二年巳巳五月十三日毛利元就大友宗麟博多と合戦す大友方戸水丹後守の沖の瀆に陣をとり、曰杵越中守の見渡の關を右

に見て南府大道を差塞ぎ川より西に吉弘右近太夫の櫛田宮の前管弦橋を北より東向に陣をとりたりに元就の軍勢佐波熊谷三戸桂等香椎山を下り松原に備を立足輕を遣し津内を放火す云々

博多記、天正二年乙亥大友龍造寺度と合戦せしと記す此大友龍造寺博多にて戦し事九州軍記等に載されども太閤記に記し筑前續風土記にも天正の頃に至り大友龍造寺博多にて度と合戦ありと記す

或某家記、天正十一年癸未十二月朔日島津より川上左京千五百人を率ひ矢倉門ありし大友の館を目掛け早朝より焼立たるにより類焼せし故家族を携へ難を遠賀郡に避けたる由を記す

附言博多津内悉皆焼亡せし事八幡愚童記に文永十一年蒙古襲來の時十月廿一日蒙古退散しぬと云し、此彼よりつとむ集るといへども親の子を尋ね夫の婦を失ひ泣歎く宿所の焼れ資財のなす何くへ立寄て身を隠すべき方も覺へて焼亡の灰の浦風に吹上られて天に塞り目もあてられ迷ひけれ落し事昨日ぞかし夜の間に角替り果ぬる栖哉仙家入し山人は半日過て出しに舊里のすぶれて改る博多へ迷ふ落人と一夜過て歸りしに本宅跡なく淺まかりし事

也も也云と果して此の如くなる時の其惨狀實に可思なり又豊太閤再興以前の焼亡の太閤記に肥前の龍造寺と豊後の大友と銚橋に及其乱十餘ヶ年に及たるを以て博多荒果たりと記し筑前續風土記に九州よとよ合戦止時かく博多も回録に及び天文十七年にも炎上し永祿十二年五月十三日此所にて毛利大友合戦ありし時毛利方より津内を放火に及びかく度と焦土となりしるバ民人各安住せを民のかまども敷へりて其後の有り無うごとくありしと又天正の頃に至り大友家と龍造寺と數度合戦に及び津内焦土となりぬとあり然る處天正五年綾部玄蕃允が古銘を削り我が寄進の如くせしと云ふ彼櫛田古鐘の銘文中に萬民安全惣而津内堅固諸人和合云と記せしを見る時の當時全く焼亡せしものとも見へざれば津内悉皆焼亡居民四方へ立去りたるの天正五年の後にして九州軍記に天正十四年八月秀吉の先手豊前へ着陣の由を聞同廿三日の夜より島津勢所々の陣をとき博多へ退き同廿四日博多よて兵糧をつかひ民屋を焼拂ひ府大道をのぶりに引とあれば此時焼残りたる博多の人家も悉く焼亡せしものあるべし

豊太閤博多再興之事

豊太閤再興以前の博多市街の状況ハ之と知るへからざれとも海東諸國記朝鮮成化七年筆作に日本文明三年當に民家一万余戸とし宗祇筑紫紀行文明十一年に佛閣僧坊數としらむ人家軒と争ひ其境四方に廣しと書たれハ文明の頃迄ハ從來の体面と存せしも以後天正に至る屢兵火に罹り津内焦土となり居民立去り衰なる有様なりしと天正十五年豊太閤九州下向の時古米繁榮の地にして其慘狀と隣み今の博多と再興せられたり此豊公博多再興の事ハ太閤記に誌し神屋宗湛日記にも之と載せたり

附言豊太閤博多再興之事史徵墨寶考證(修史局藏版)より載京都妙滿寺藏天正十五年五月二十九日豊太閤肥後國八代より北政所へ贈ら

れたる書簡中六月五日をろちくせんのかよはうたまで参可申候は
あたにてふま申つけ七月十日をろ大坂へかへり可申云々あり
此普請申付則博多再興の事にて此の如くある時箱崎宿陣の折柄
博多の焼跡を見惨怛の情を起され俄然再興思ひ立れたるよあらま
前以てより最も其企てありし事にて又もつて其厚意可思也

太閤記天正十五年六月

七日博多に至り給ふて箱崎の八幡宮寶殿を伏拜み給ふ即此所に御殿
を立させ給ふて御逗留有御備の衆前後左右町屋作り又小屋といとな
ま不我劣と結構を盡しけり秀吉八幡の寶殿よりいぬま給ひて慰ま給
ふ陸いにてかくかん

千とせをもたゝと入たる箱崎の松も花さくれりよわといや

古まへの博多箱崎之在家十萬間有て泉州堺の津にもをととざる富る
家をわかりしが肥前龍造寺と豊後の大友宗麟と及鏝楯其乱十餘ヶ年
よ及一のばりたばりに荒ててゆわれに見へにけり秀吉絶たるを起
さばやと覺され堅横之町割十町宛に定られ博多の古老を呼出され打
渡し給ふ町人は有難き御再興かなと悦び晝夜を分き家々のいぞぎ

甚し云々

神屋宗湛日記天正十五年

一丁亥六月三日薩摩ヨリ被成還御筑前國箱崎社内ニ關白様御陣ナサ
レ候ニ依テ同七日ノ晝松浦カラ津博多焼亡ニヨリ宗湛ハ當時肥前
唐津ニ客居セシ也ヨリ參上仕テ箱崎ニツキテ八日ニ關白様ニ御目
ミエ仕候也宗及老御取合

一同十日ニ關白様博多ノアト可有御覽トテ社頭ノ前ヨリフスマト申
候南蠻船ニメサレ博多ニ御着候御船ニ乗候モノハハタル兩人宗湛
其外小性衆也博多ノハマニテ御進物チアゲ申候ハ其ノ内銀子一
枚バカリ被召上候其外ノ物ハ博多へ被下候也

一同十一日ヨリ博多ノサシ圖チ書セラレテ十二日ヨリノ町ワリニ博
多町ワリ奉行衆事瀧川三郎兵衛トノ長東大藏トノ山崎志摩トノ小
西攝州此五人ナリ但一人ヲ脱ス一本ニ石田治部トノトアリ下奉行
三十人アリ中畧

一關白様宗及所々御會

御相伴三松様休夢兩人御カヨイ宗及搥屋ノ座敷ニチン板モソリン

宗及天王寺
屋今井氏
三松 尾州
斯波家津川
玄蕃允兄
休夢小寺氏

ノ墨蹟懸テ手水ノ間ニホソクナニ花生テ風炉アラレ釜新ツルベセ
ト茶碗ニ道具入テ菓メソツウ引切右御茶過テ又關白殿花ナ御生候
也座中ノ衆ドツトカンセラレ候其後ニ向ノ休夢陣屋ニテ御袴ナド
ムカセラレテ又被成御出テ一折センヅカト御詫ニテ

御發句

しやのまのよとま邊涼しき候とのまへ

上様

立ゑるかけれまける松竹

宗及

關の戸を明て此句忘れし

上様

コノ後付合

たてあらへる門のみきまぬ

休夢

博多町幾千代までや佐のるらん

上様

此御句博多ノモノニキカセ申カイヲト各御ホウビ候ヘハ
上様御キゲンヨキナリ

石城遺聞上卷終



